コンステラチオン

町

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コンステラチオン

【Ｎコード】
Ｎ７７２５Ｉ

【作者名】
町

【あらすじ】
時は２３世紀。統合国家共同体ルーフの誕生により、国という概念が消え去りつつある時代。完璧なる福祉を目標に掲げるルーフだが、その一方でナショナリティやエスニシティにこだわるものはみな、「赤線」と呼ばれる「屋根の下」に追い出す非情さを持つ。
ごく普通の女子高校生だった木ノ内いばらは、教師の身代わりに殴られたことにより、「赤線」出身にして校内一の厄介者であるロビン・メイと親しくなる。そして彼からのささいな頼みごとを引き

受けたとき、いばらは文字通り「茨の道」を歩むことになっていく。

天災の予知能力を持つがゆえに統合国家共同体保安委員会の頂点に君臨する若き総帥セア・サルベ。

保安委員会の精鋭部隊シーカーズの元メンバーでありながら、犯罪国家に加担し逃亡者となった花沢緋和。

許されざる大罪を犯したがゆえに地上から抹消された新興国家の民ロビン・メイ。

彼らとの出会いの中で、いばらがたどり着く真実とは。

＊

近未来を舞台にしたファンタジーです。

序章（前書き）

＊ひらがなを多用しているのは、作品の内容・作者の文体にやや堅苦しさがあるため、見た目だけでも柔らかく見えるようにという考えからです。変換忘れ等ではありませんので、ご了承ください。

序章

腐った水の匂いがする。

新しい世界に流れ出すことができず、同じ場所に留まり続け、濁ってしまった水。息をするために空気を吸い込めば、形容し難い悪臭までもが気管を通って身体の裡に滑り込んでくる。重量感のあるその空気は、やがて肺に満ちて溺死に導いていくのではないかとさえ真剣に思う。その様子を想像すれば、運動によって熱を帯びていた身体が途端に冷えていくようだった。

（行動を起しても起さなくても、結局、死は身近にある）

気持ちの揺らぎが、踏み出す足に影響する。

（やらぬ後悔の中で死ぬか、やった清々しさの中で死ぬか、そのどちらかだ）

平生から自身や仲間たちに言い続けていた鼓舞の言葉も、汚水の匂いを嗅ぎながら胸中で呟くだけではひどく心許ない――惨めさに、目頭が痛くなるのを感じた。なんと自分は、自分たちは惨めなのだろう。

「高野さん、遅いです！」

振り返りもせず、先行していた女が叱咤を放つ。

彼女の耳のよさに感動を覚えつつ、二度目の叱咤が飛ばぬよう足を速めた。

高野安吾は、今年三十を迎える青年である。三十歳には壮室という異称があるが、安吾はまだ室――つまり、妻をもらったことはない。学生の身であるためだ。

今から二十年前の二一九九年、母国である日本が統合国家共同体ルーフに正式に加盟することが決定した際、安吾の両親はそれをよしとせず、自ら日本国籍を返上し、無国籍の民として統合国家共同体内特別居住地区――通称赤線に住む選択をした。両親の選択に倣うかたちで無国籍となった安吾は、それまでとまるで異なる赤線で

生活の辛さから両親の愚かな選択を恨んだ。
赤線には政府が存在しない。そのため、福祉というものがない。福祉がないということは、学校はおろか病院すら存在しない。通貨を管理する場所もないため、「金」というものはあってないようなものだ。結果として、ひとは欲しいものは暴力で勝ち取るようになる。罪を罪だと告げる裁判所もなければ、罪人を捕らえる警察もない。赤線に移り住んだ初めの一年、安吾は外出することを両親から厳しく禁じられていた。
しばらくすると自然発生的に自治組織がいくつか作られたが、互いが互いの優位を競い合ってはいがみ合うばかり。その様子はまるで一九世紀のシカゴにおけるイタリアン・マフィアのようだと、安吾の父は言っていた。そのころの安吾は、もはや街角で銃声や悲鳴が聞こえてもさして驚くようなことはなかった。ただ、一刻も早くこの場所から抜け出し、再び日本国民になりたいと考えていた。だから安吾は少年時代のすべてを勉学に注ぎ、留学制度を利用してもう一度日本に戻ろうと考えたのである。そのため、安吾が高校に進学することができたのは、二十歳を過ぎてからであった。しかし、いざ日本の学校に『留学』した安吾を待っていたのは、さらなる絶望だった。
（親父たちが間違ってたことを思い知らせてやろうと思っていたのに）
胸中に湧くのは、憧れていたはずの日本で過ごした十年間。
今こうして日本に背を向けているというのに、一欠けらの寂しさもない。
（……結局は、おれが間違っていたことを思い知らされた）
考えごとをしている余裕などないはずなのに考え込んでしまうのは、単調すぎる逃亡劇に飽いてしまったせいだろうか。踏み出す前に何度も繰り返しイメージしたはずの明るい未来は、いつの間にかどこかに消えてしまった。歩き出す勇気をくれたはずの希望に満ちた展望は、今や周囲の薄暗い景色の強烈さに塗りつぶされてしまっ

ている。決してしないと高をくくっていたはずの後悔が、ゆっくり首をもたげていた。死など怖くはないと仲間たちにうそぶいていたが、いざ、死に肌を撫でられてみると、身体中の血が凍りついてしまったかのような心地に陥る。

怖い。

怖くてしかたがない。

（おれは、間違ってなどいない。間違っているのはあいつらだ……！）

下唇を強く噛むことで自身に喝をいれ、弱音を追い払う。

――人間って、普通は屋根の下に住むものだわ。

無邪気にそう言って笑ったのは、最初で最後の恋人だったひと。彼女の考えだけが特に変わっているというわけではない。それを聞いていた周囲の誰もが、異論を挟むことなく当然のように頷いていたのだから。

念願の留学を果たした安吾が憧れの地で知ったのは、赤線はひとの住む場所として認知されていないという、信じ難い事実だった。統合国家共同体の通称であるルーフは、「降り注ぐ災厄から身を守る屋根」という意味でつけられたという。しかし、屋根は無限大にどこまでも広がっているわけではない。統合国家共同体という家の住民ではないものは、みな家畜である。たとえそれが同じように人間の姿をしていたとしても。だから彼らは平気で赤線に住まうひとの命を無視する。

統合国家共同体保安委員会総帥セア・サルベの名前にて、日本は静岡県伊豆半島で大規模な地震が発生すると予告されたのは一月前のことだった。防衛庁と保安委員会日本支局の先導によって避難活動は滞りなく遂行された。しかし、予想被災地区に存在する赤線の住人に、その情報が伝達されることはなかった。保安委員会は屋根の下を守る組織であって、赤線を守る組織ではないからだ。一ヵ月後に発生する災害を予想していながら、彼らはなんの罪悪感も抱かぬままに赤線に住まう何千人というひとびとを見殺しにする選択を

したのである。
たった一言、地震が近々起こるのだと教えるだけでいい。しかしルーフがその手間を惜しんだのは、未だルーフに加盟していない国や他の地域にある赤線への見せ付けである。ルーフに逆らうから被害に遭う。死にたくなければルーフの下に集えばいい。優しい笑顔で手招きしながら、彼らの実際は非常にシビアだ。
安吾には耐えられなかった。
だが、赤線への電話も手紙も保安委員会による検閲が入るため、正規の方法で彼らに地震のことを伝えることは叶わない。安吾が厳罰を覚悟でアンダーグラウンドな組織に足を踏み入れたのは、このときだった。正当な手段では誰も助けられない。だから、正しいと思うことを成すために犯罪に手を染めた。
つまり、反ルーフ組織黒猫への加入である。
表向きは勤勉な留学生を演じつつ、安吾は秘密裏にこちらで得られたニュースの映像や新聞記事――特に迫る地震に向けての詳細な情報――を黒猫に横流しし続けた。統合国家共同体情報管理法に違反するから、見つかれば二十年は牢屋から出られない。隠しとおせるとは、もちろん思っていない。赤線のひとびとが地震の発生予告日に合わせて避難をすれば、ルーフ側に密告者がいるのは明らかだからだ。もちろん、素直に逮捕されるつもりもない。役目を果たした安吾は、黒猫の手引きを受け、かつて嫌悪していた赤線へと帰還することを決めたのである。
時計を見るいとまなどないから、どれくらい自分たちが走り続けているのかなど分からない。まだ、ほんの数分程度なのかもしれない。あるいは、もう数時間が経過しているのかもしれない。延々と続く無愛想な下水道の壁では距離は計れず、月明かりも射さない地下にいては時間の変化もわからない。ただ、前を往く人影――その首の辺りで陳腐にきらきらと光るネックレスを見失わないように追いかけるのみ。
（随分な健脚だな……さすが、史上最悪の国際指名手配犯）

陽射しの下でまみえたことはないから、彼女の顔をはっきりと見たことはない。それでも、髪型や化粧で印象を変えてはいるものの、世界中で最も有名な二枚の手配書のうちの一枚に写っている人物だというのは分かった。

花沢緋和――統合国家共同体保安委員会の元エリート将校でありながら、五年前に新興国家ホンハと共謀して世界規模のテロ行為を画策したと言われる女犯罪者である。年は安吾より一回り近く若いが、佇まいには貫禄があった。数年前にちょっとだけ人気のあったアイドルに似ている、可愛らしい顔立ち。だが、年の若さや性別を理由に侮ることを許さないしたたかさが、緋和にはある。

赤線へと逃亡する旨を黒猫のリーダーに伝えた翌日、彼女が目の前に現れた。彼女は黒猫のメンバーではないが、ルーフから赤線への逃走には必要不可欠な人物なのだという。やってきたのがひとりきりであることに心許なさを覚えたが、「地震の避難で日本警察の警備は手薄だから」と事も無げにいわれた。確かに彼女のいうとおり、下宿から地下道、そしてこの場所に至るまで、敵に見つかったという気配はない。真夜中という時間帯もあるのだろうが、人数が少ないため目立たないのだろう。

「――高野さん」

再び名を呼ばれる。

北極星のように常に安吾の目先にあったネックレスが、唐突に動きを止めた。緋和が立ち止まったらしい。まさか後ろ姿を見つめていたことを気味悪がられた、というわけではないだろう。怪訝に思いながら、安吾は急に立ち止まって心臓に負荷をかけないよう、徐々に速度を落としてから足を止める。夢中になって走っていたときには気づかなかったが、一旦止まってしまうと、胸が張り裂けそうなほど痛い。足も感覚が失われつつあり、バケツで水を被ったようにぐっしょり汗をかいていた。

はなざわさん、と呼びかけようにも声が出ない。女性に対して失礼かと思いながらも、彼女の袖をくいっとひっぱって存在を示す。

「逃走、バレてます」
ほとんど呼吸も乱さないまま、緋和は淡々と告げる。
激しい運動のために早鐘を打っていた鼓動が、その瞬間に止まりかけた。耳を澄まして足音を拾おうとするのだが、自分の心臓がうるさすぎて分からない。
「余計な心配しながら走るのは面倒ですから、さっさと片をつけましょう」
唯一、彼女が全力疾走をしていたことをしのばせるのは乱れに乱れたミディアムボブの髪の毛。しかしそれすら、軽く頭を振ってしまえば消えてしまう。
「はな、ざ、さ?」
「――来ます」
無慈悲に宣告するや否や、どん、と力一杯肩を押されて斜め後ろの壁に背をぶつける。痛いという抗議をすることはできなかった。月明かりさえ射していないはずの下水道、だというのに、緋和の周囲だけが茫洋と光を帯びだす。
しかし、疑問を彼女に呈すことはできない。
果たして緋和の言うとおり、走ってきた方角から複数の足音が響いてきたからだ。そちらに目をやれば、一瞬、焼けるような眩しさが目を刺す。後ろめたい逃亡者とは異なり、彼らは各々の腕にライトをつけていた。それを直視してしまっていたのだ。
「動くな!」
叱責にも似た制止。
緋和は鼻で笑って腕を組む。
「最初から動いてないわよ。待っててあげたんじゃないの」
それはけして大きな声ではなかったが、幽かに水の流れる音しかないこの場においては、除夜の鐘のようによく響いた。急激に汗が引いていくのを、安吾は感じる。
彼女は堂々としていた。
世界中のひとびとから極悪人と唾棄されているにもかかわらず、

彼女はなにも恥じることはないのだと言わんばかりに背筋を伸ばして立っている。それは、大勢のひとびとを救ったという大義名分を背負ってなお、刑罰への恐怖ゆえに縮こまっている自分とは対照的だった。一体誰が彼女を、五年前、犯罪国家ホンハと共謀しルーフ転覆を目論んだテロリストだと思うだろうか。

「こちらは統合国家共同体保安委員会対内諜報活動部一課特別執務官チーム、シーカーズだ。黒猫メンバーの高野安吾と国際指名手配ナンバー八二五花沢緋和だな」

追手は三人。予想よりは少ないが、それでもこちらより人数は多い。だが、それよりも安吾の肝を冷やしたのは、彼らがシーカーズを名乗ったことだ。

ルーフに反対するものは少なくない。その多くは、国という枠組みにより自国の伝統や民族意識の喪失を恐れ、ナショナリズムを主張するものたちである。ルーフの創立者であるベルナルド・アレクシアは生前、けして自身の主張を他人に強制することはなかった。それは当初の全く支持をされなかったころから、大統領となり強制力を持ち得た最期まで一貫していた。彼の遺志に敬意を示し、ルーフはあからさまに愛国者たちを弾圧しなかった。そのため、あるものは筆を取り、あるものは歌に込め、あるものはキャンバスを彩る、といった様々な反ルーフ活動が以前は行なえたという。

だがひとり、あるいは一国がルーフの寛大さに、国境がないというだけで得られる大小様々な利益に気付くと、それまでナショナリズムを主張していたひとびとは一気にルーフに身を任せるようになる。

その一方で、国や仲間たちを裏切った同士を苦々しく思いながら、また事態がちっとも自分たちの思うように進まないことに苛立つナショナリストらは、二一九一年ロシアで起こった「クレムリンの暴動」以来、暴力さえも訴える手段にした。

そこで組織されたのが、統合国家共同体保安委員会である。二二〇一年に二代目セア・サルベにより設立されたこの組織は、ルーフ

内の警察として様々な実績と権力を有す。設立から一八年の現在、ルーフの中核を為す統合国家共同体運営委員会よりも重要視され始めている。
保安委員会の中でも限られたエリートたちしか纏うことが許されないという黒一色のトレンチコートは、歴史の教科書でしか見たことがなかった。ルーフの治安を守ることを唯一絶対の指針とし、いかなる敵も「探し」（Ｓｅｅｋ）出し抹殺するという、反ルーフ組織の死神集団。うわさでは、シーカーズひとりいれば国を変えることもできるという。地震の件もあるから、余計なことはせず、真っ向から少数精鋭をぶつけてきたのだろう。いくら史上最悪の指名手配犯と名高い花沢緋和でも、分が悪いのではないだろうか。
「ナンバーはそちらが勝手に決めたものだから覚えていないけれど、あたしが花沢緋和なのは間違いありません」
ていうか、八二五番目なんだ。あたしがいたころより随分増えたなあ。
呑気に感心しては、振り返って安吾に同意を求める。
あまりにリラックスした様子に、戸惑っているのは安吾だけではない。追手である三人組は、声を押し殺してなにかを確認するようにぼそぼそと言い合っていた。
「今ごろ相談？　シーカーズが敵と相対したとき、執るべき手段はひとつでしょう」
余裕ぶった態度のまま、緋和は掌を天に向けるようにして手を挙げる。まるでバスの添乗員が窓に映る景色を示すような仕草。しかし、地下道には見るべき景観などあるはずもない。
「タトゥタリア」
それがひとの名であると知ったのは、「おう！」という威勢のよい返事がしたかと思うと、緋和の背後からごく自然に長身の女が姿を現したため。闇を切り裂いて纏ったような漆黒のドレスに、煌く星を思わせる豊かな金色の髪、皓々と降り注ぐ月光よりもなお青白い肌。長身と相まって、その女の存在感は異常だった。併走してい

たはずならば気づかないはずはない。だが、安吾は彼女の存在にはたった今気づいた。
夜の化身のごとき女は、自身の手を、挙げられたままの緋和の手に重ねる。それで安吾は、緋和の仕草がエスコートのためのものだと知った。ジーンズ姿の緋和はさておき、タトゥタリアと呼ばれた女はドレスを纏っている。そのため、まるでこれから舞台に向かうダンスのペアのようだった。悪臭漂う下水道という場所、そして殺伐とした雰囲気と相まって、その姿はひどくシュールである。
「サルベ総帥はなにを指導していらっしゃるのかしら」
緋和が、まだ幼さを残す愛らしい顔立ちに似つかわしくない表情を乗せた。それはとなりに立つ、色無き髪の不思議な女も浮かべる嫣然たる笑み。
「しょうがないから、あたしが、元先輩の誼として指導して差し上げますね」
それが、戦いの合図。

＊

朝礼を終え執務室に戻るなり、中央に設置されたソファへと腰を降ろす。来客用にと部下が用意してくれたものだが、応接室は別にあるため、もっぱら自身の休息用に使用していた。肘置きに置いてあったブラックウォッチ柄のストールを肩に掛け、背もたれに体重を委ねてまぶたを閉じる。いつのことだったかもう定かではないが、仮眠のつもりで横になって本格的に寝入ってしまったとき、その寝心地のよさに部下の本心は別にあったのではないかと考えたことがある——その部下はもういないから、彼女の真意を確かめる手立てはないのだが。
瞑目し、寝心地の好い体勢を探るように身じろぎをする。着信を知らせる短い電子音が室内に響いたのはその直後。無視をしようかとも考えたのだが、応答しなければ鳴らされ続けるのは分かってい

た。自然、刻まれてしまう眉間のしわを折った食指の節で伸ばしながら、低く応えの声を放る。部屋の中に四箇所設置されているマイクのひとつが音声を拾い、通信機を受話モードに切り替えた。
『――日本の首相より総帥宛てに通信が入っております。お繋ぎしても？』
機械を通して、若い男性オペレーターの声が届く。
（あの件か）
用件は聞かずとも内容に察しはつく。
多忙ではあるが、出勤時の車中で大体のニュースには目を通している。
（誤りなどあり得ない以上、報告など要らないのに）
億劫さが深い嘆息をつかせる。が、これこそ無視をするわけにもいかない。
総帥と呼ばれた青年は、未練たらしく一度ソファに沈んだものの、やがて観念したようにストールを乱暴に剥ぎとって立ち上がる。たたみもせずチェック柄の布をソファに放り、執務机へと向かう。シングルサイズのベッドほどある机の上、端に伏せて置いていた鏡を取り上げてちらりと一瞥する。金色というよりは砂の色に近い薄い色の髪に乱れはない。念のため、つむじから襟足にかけて掌で撫でておく。不機嫌な表情はどうせ変わらないから無駄な努力はしない。
「繋げ」
無意識にシャツの襟を撫でながら許可をすれば、すぐさま机上の端末がスリープモードから通常モードに変わった。画面の右上にあるマークが、オンライン状態にあることを示している。一呼吸後には、真っ白だったデスクトップ画面に褐色の肌をした初老の男性が大写しにされた。
『ご無沙汰しております、セア・サルベ保安委員会総帥』
勢い込んで話したためか、男の言葉はわずかに聞き取りづらい。
「お久しぶりです、臥島首相。お元気そうでなりによりです」
鏡など見なくとも、上手な愛想笑いが浮かべられていることが分

かる。
『わたしがこうして元気でいられるのは総帥のおかげございます。誠に今回のことはなんとお礼を申し上げたらよろしいか……』
嬉しさを隠しきれぬ、といった異国の首脳の様子は見ていて悪い気はしない。彼を喜ばせているのが他ならぬ彼自身――セア・サルベによるものだからだ。先ほどまで気乗りしていなかったことも忘れ、セアは少しばかり口許を緩める。
「では、わたしの予報は的中していたのですね？」
『予報などとはご謙遜を。あれこそまさに預言……古の聖人たちにも匹敵するほどの奇跡でございました――地震の発生時刻と震源地とぴたりと当てるなんて！』
思い出しながら気が昂ぶってきたのか、温和さを漂わせる臥島老人は鼻息も荒く画面の向こうで熱弁した。政治家は腹芸をするものだとは知っているが、さすがにこれは本心だろう。まるで未知に遭遇した少年のように双眸を煌かせる臥島に、ほんの少し苦いものが混じった笑みを浮かべてしまう。二年前の保安委員会総帥就任式で会ったときには、弱冠を迎えたばかりのセアに対して侮りの視線を向けて憚らなかった男である。感情というのは不思議なもので、たった一度の転機でまったく別のものになってしまう。おそらく彼は今回の一件で、セアに対する認識を大幅に変化――つまり、かなり好意的なほうへと――させたことだろう。
『本日午前五時一分、静岡県伊豆半島を震源としたマグネチュード九、二の地震。確かに発生いたしました。一ヶ月前にご連絡をいただいておりましたので、万事抜かりなく住民の避難は終えておりまして、死者も負傷者も〇人。倒壊のおそれがございました住居も対策済みでしたので、被害もほとんどございません。国民一同、サルベ総帥への感謝の念でいっぱいでございます！』
なにを言っても初老の政治家を興奮させるだけだろうと踏み、セアは笑みだけで応えた。臥島は声を詰まらせ、やがて感極まったように目も潤ませる。大仰だとは思わない。自分の祖父よりも年上で

あろう政治家たちに通信中に号泣されることも多々あるセアからすれば、むしろ臥島は奥ゆかしいとさえ思う。

地震――否、地上に起こるあらゆる天災の予知。

それが、セア・サルベという、弱冠二二歳の青年を「総帥」などという大層な地位に押し上げた理由のひとつである。いかに高度な計算を用いても、いかに自然を四六時中注意深く観察していても、天災を予測することは難しいとされていた。しかしセアならば、地球上のどこに起きる天災であろうとも予知できる。しかも発生地はもちろんのこと、発生時刻も分単位で予知できるのだ。

画面の向こうで誰かが臥島に囁くと、必死で涙を堪えていた老人は思い出したように「映像を流してもよろしいでしょうか」と訊ねてくる。頷けば、画面の脇に小さなウィンドウが開かれた。ストリーミング中を示すアイコンが現れるが、すぐに薄暗い市街地の映像に変わる。

どこかの高いビルに設置されたカメラからの映像なのか、街を俯瞰するようなアングルだった。人影が街頭に見当たらないのは、明け方のためではなく、臥島が先ほど言った避難のためだろう。しばらく面白みのない映像を眺めていれば、急に巨大なものが落下したような、重く低い音がひとつ。続いて映像はがくがくと揺れだし、物が振り回されるような音が聞こえた。小さく何かが割れる音も聞こえる。揺れがおさまったあとも、スピーカーからはノイズのように細かく無数に物が落下したり割れたりする音が聞こえ続けていた。一箇所の、それも高い場所からの映像であるため、具体的な被害状況は分からない。それでも、ひとがこの中にいれば確実に危険だということは分かる。

次に映像は切り替わり、広い室内――どこかの学校だろう――が映った。室内には老若男女問わぬさまざまなひとびとがおり、カメラを向けられるたびに屈託のない、あるいははにかんだ笑みを見せる。訊ねずとも、彼らが避難している住人だということは分かった。そして彼らは口々にいう――サルベ総帥ありがとう！

『何度申し上げても足りません。総帥、ありがとうございました』
大規模な天災に一度見舞われれば、多くの民が死ぬ。そして被災地の再建にも莫大な費用が必要となる。なにより、国中に暗い感情が蔓延してしまう。国のトップに立つものたちがセアの力を敬うのも当然だろう。
「わたしの役目は統合国家共同体を守ること。加盟国にして、ルーフの理念に深いご理解を示しておられる日本国のお力になれたのなら幸いです」
ますますの共同体へのご協力を期待しております。
告げれば、画面の向こうで深々と臥島は頭を下げた。これで日本国が共同体に叛旗を翻すことはないだろう。日本人は義理堅い民族と聞く。何千という国民と何億という損害を救ったのだ。向こう二十年は協力的でいてくれるだろう。
『伊豆というのは古来より地震の耐えぬ地域でありまして、およそ一世紀ごとに大きな地震が起こることで有名なのです。近年ですと今を遡ること二百年ほど前の一九四四年に起こりましたもの、二一一〇年に起きたものなど、筆舌しがたい被害の規模でして』
放っておけばいつまでも蘊蓄を語りそうな雰囲気である。
話の腰を折るために、セアは口をさしはさむ。
「ええ、存じております。わたしの父は静岡の生まれですから。その二一一〇の地震には曽祖父が遭遇しておりまして、とても大変だったと聞いております」
それまでの統合国家共通語ではなく流暢な日本語で話してやれば、途端に臥島は目を瞬かせ、ますます敬意と親しみを込めた眼差しでセアを見つめてきた。そのあまりにも真っ直ぐな視線に、やや戸惑ってしまう。逆効果だったらしい。
（マルチリンガルなど珍しくもないだろ）
統合国家共同体が誕生してから、半世紀が過ぎた。統合国家共同体に加盟している国ならば公用語として統合国家共同体と母国語が併用されている。そして、義務教育では第三言語と第四言語の習得

も必修となっているから、最低でも四ヶ国語を使用することができるのが普通だ。しかし、日本が統合国家共同体に加盟したのはほんの二十年ほど前だったことを思い出し、眼前の老人が驚くのも無理はないと思いなおす。そういえば、彼の統合国家共通語は非常に巧みで滑らかであるが、時おり訛りのように不自然なイントネーションがある。ネイティヴ・スピーカーではない証拠だ。日本が加盟したのち、彼は必死に勉強をしたのだろう。

セアが日本語を自由に扱えるのは、なにも父親の祖国に対して愛着があるためではない。必要に迫られて獲得しただけの話だ。が、そのようなドライな事実をあえて知らせるよりは、誤解のまま通すほうが有益だろう。セアの期待通り、臥島は感極まったように言葉を詰まらせた。

『そう……ええ、左様でしたな。総帥のご父君は日本人でございましたな。頭では分かっているのですが、総帥は母君によく似ておられ、あまり日本人然とした顔立ちをしておられないためすぐに失念してしまうのですよ』

しみじみと呟き、じっとセアを見つめる。

面映さを覚え、セアは思わず目を逸らしてしまう。

まるで祖父と孫のようだ。

『総帥に就任する以前は日本で暮らされたこともあったとか。ご多忙の身とは存じますが、お時間がございますときはぜひこちらにも足をお運びください。国民一同歓迎いたします』

近いうちに、と社交辞令を混ぜて頷けば、嬉しそうに老人は笑った。

臥島はいつまでもセアと話したがっていたようだが、あいにくとそれほどひまな立場でもない。純粋な謝罪がきな臭い政治の話に転換するのも面倒だ。いくつか短い言葉を交わしてから、半ば強引に別れの挨拶をして通信を切り上げる。

画面が元の通りスリープになったのをみつめていると、狙いすましたようなタイミングでノックがされた。誰何すれば、秘書代わり

をさせている士官の名が返ってきた。入室を促せばゆっくりと木製扉が開いて、ひとりの女が姿を見せる。保安委員会の制服である黒一色のスーツに、きっちり結わえられた真紅のネクタイ。それに東洋人特有の艶やかな黒髪のおかげで、重々しい存在感がある。部屋の壁が白いということもあり、彼女の姿は妙に浮いていた。

「日本国での地震予知、的中おめでとうございます」

拍手でもしそうなほどに嬉しそうな様子。

苦笑しながら、セアは椅子から立ち上がる。

（予知ではないのだから、外れるはずがないんだけど）

もちろん、言ったところで信じるものはいない――セアには、地球の声が聞こえる。地球はセアが語りかければなんでも応えてくれた。いつどこで火山が噴火するのか、台風が生まれるのか、地震が起きるのか、すべてを地球は教えてくれる。セアはただそれを伝えるだけだ。予報でもなければ予知でもない。あえていうのならば、なるほど、臥島の言ったとおり「預言」なのだろう。ただし預かるのは神の言葉ではなく「地球」の言葉なのだが。

「祝辞を述べにきたわけではないでしょ。用件を言いなよ」

ジャケットの袖をめくり、腕時計を確認する。間もなく時計の短針は十時を指そうとしていた。午後三時からヴェトナムはハノイ、つまりホンハと呼ばれていた国の跡地で行なわれる会合に出席しなければならない。五年前、まだ保安委員会の一将校であったセアが参加した作戦の後始末をつけるためだ。それゆえ、そろそろここを出て空港に向かわなければならない。

促せば、女士官は長靴の踵をぴたりと合わせて姿勢を正す。

「――地下鉄が動き出しました。場所は日本です。近々、摘発する予定だった反ルーフ組織黒猫のメンバーひとりが赤線まで運送された模様」

まだあどけなさを残す顔立ちを緊張に強張らせながら、女士官が告げる。

内ポケットからミント味のタブレットを取り出し、セアは奥歯で

噛み砕く。
煙草を嗜まない彼の、これが精神安定剤というところだ。
「……地下鉄の車掌は」
「ハナザワ・ヒオ」
聞き間違えなどできぬほどに、ゆっくりとはっきりと女は言う。
ガリガリと奥歯で菓子を噛みながら、ついとセアは窓の外に目を遣る。ブラインドが上げられたままの窓からは、ゆったりと浮かぶ雲とどこまでも澄んだ青空が見えた。他に建物が見えないのは、この部屋が高層にあるためである。それほど多くの職員が詰めるわけでもないのに辺り一帯で最も高いビルを建てさせたのは、他の建物からの盗撮を防止するため。ビル自体は七〇階を越えるが、実際に使用しているのは四〇階以上のフロアである。それ以下の階は資料室や食堂、仮眠室などに割り当てられていた。周辺の住民たちはもちろんのこと、世界中から、このセア・サルベの居城たる統合国家共同体保安委員会本部が畏怖や侮蔑の眼差しを向けられていることは知っている。神の不興を買ったバベルの塔の模造品。世界を睥睨するような威圧的な建物。まるで、総帥たるセアそのもののようだ、と。
「予定変更だ。ハノイには行けなくなったと、ヒサテリア副総帥にお伝えしろ。地下鉄の件も忘れずにお伝えしてくれ。文句はないはずだ」
一瞬虚を突かれたように瞠目するものの、女士官はすぐに気を取り直し敬礼をして身を翻す。その背を見送りもせず、セアは先ほどソファに放ったストールを取り上げる。社交辞令を言ったばかりだが、本当に日本に行くことになるとは。
（五年ぶりか）
父の祖国。少年時代を過ごした場所。そして、すべてが始まった地。
幾度かクリーニングに出しているため、もはや残っているはずなどない。それでも気づけば口許に布を押し当て、探ってしまう。

いなくなってしまった大事なひと、その残り香を。

第一章

「それまで西洋を支配していた絶対的な価値観が産業革命によって没落した様を、ニーチェは『神は死んだ』という言葉で表した」

先刻折ってしまったものに代わり、真新しいチョークで机をこつこつ叩きながら教師は教科書を読み上げる。本来ならば「Ｇｏｔｔｉｓｔ　ｔｏｔ」と書くべきところが「Ｇｏｔ　ｉｓｔ　ｔｏｔ」と誤っているのだが、指摘する生徒はいない。みな、黒板など見ていないのだ。

「科学の光が世界の至るところにはびこっていた闇を消し去ってしまい、結果として神さえも殺してしまったと嘆いたんですね。ですがまあ、同じくドイツの思想家であるマックス・ウェーバーなんかは、科学の力があるからこそ、ひとはさらに遠くまで移動できるようになり、別の文化に触れることができるようになったって言います。『絶対的な価値』が没落したのちの世界は、『価値ある多神教』、つまりマルチカルチュアリズムの世界へと変貌を遂げていくってね。建国の神話を持たない国はありません。誰もが、意識、無意識は別として、自分たちが選ばれた神の末裔だと信じながら生きているもんなんです。古来より、国家と宗教が強く結びついてきたのもそのためですね。政教分離の歴史が、そもそも国家と宗教の親和性を示していますし」

熱がこもったせいか、チョークがまたぱきりと音を立てて折れた。

最前列の席に座っていた女子生徒は、ころんと落ちてきたチョークの半分をいやそうに摘み上げて教卓に戻す。教師は新しいものを出すことを諦めたようで、異様に短くなったチョークで相変わらず机をノックし続ける。

「神とはなにか。不可視であるがゆえに、誰もが肯定も否定もできぬ存在。近代以前では、戦争の絶好の大義名分として用いられ、その名と姿はプロパガンダに多く織り込まれてきました。神を巡って

血が流されたことも多い。しかし、『神が死んだ』のちの近代に誕生したナショナリズムは、自身らが正統なる神の末裔であることを示すためのものではなく、国家福祉を維持するための装置なのです。ですけれども、なんといいますか、過激な愛国心の扇動は過度なナショナリズムの台頭を――木ノ内！」

教科書を朗々と読み上げていた声が一転、鋭い叱責に変わる。

昼休みを目前に控え、弛みだしていた教室内の空気が途端に緊張を孕む。呼ばれた女子生徒がびくりと肩を震わせたものの、未だ顔を机に伏せて眠っていることが、ますます教壇に立つ教師の怒りを増幅させていく。

「木ノ内！　木ノ内いばら！」

声だけでは足りぬと見えて、思想史を担当する若き男教師は教科書を丸めながら教壇を降りた。足音も荒く床を蹴り、教壇から見て一番奥、窓から二列目の席へと向かう。教科書を立てて内職に勤しんでいたり、頬杖をついて別のことに意識を飛ばしていたりしていた生徒たちは、自分に火の粉がかからないようそれとなく受講体勢に戻る。しかし、名を呼ばれた当の女子生徒――木ノ内いばらは居眠り姿勢のまま。

「……木ノ内くん」

丸めた教科書を手に仁王立ちしながら、教師は冷ややかに不遜な教え子を見下ろす。広げられた教科書は、授業開始の際に指定したページのまま。どれぐらい彼女が惰眠を貪っていたのかが分かる。

ため息をついて、丸めた教科書で机を小突く。教室にいるほぼすべての人間の注視を受けながら、木ノ内いばらは身体を揺すった。それから、茶色に染めている短い髪に指を差し込みぐしゃぐしゃと乱しながら顔をあげる。いつも掛けているセルフレームの眼鏡はきちんと外して脇に置かれていた。ついつい居眠りを、ではなく始めから寝るつもりだったことは明らかである。

「あ」

授業中の教室で聞くにはあまりにも場違いな、素っ頓狂な声。

それから、慌てて教師から向けられている冷たい視線を遮るように教科書を持ち上げる。しかしすぐに無駄と悟ってか、いきなり起立して深々と頭を下げた。終了のチャイムが鳴るにはまだ十分早いから、これは謝罪の意味である。

「す、すみません……！」

明らかに寝起きとわかる声に、教室の各所から失笑が漏れた。

落ち着かない心地を誤魔化すため、制服のリボンを無意味に指でいじる。

「家の手伝いが大変なのは分かるけどねえ。学校に寝に来ているのかい、きみ」

身長差があるため、立っていても教師からは見下ろされる。威圧感に挫けそうになりながら、いばらは殊勝な表情で再度謝罪を口にした。こうして授業中の睡眠を咎められるのは初めてのことではない。またも同じことを繰り返してしまったという自己嫌悪に、いばらは途方に暮れてしまう。

「別に睡眠学習でもいいけどね、ぼくは。ちゃんと授業を理解しているなら寝ていてもなにしていても構わないけど。で、『神は死んだ』と言ったのは？」

鷹揚なようでさらに逃げ道を塞いでくるのは、よほどいばらが同じ過ちを繰り返していることに対してご立腹なのだろう。机の上の教科書も前方の黒板を見るのも許さぬと言わんばかりの、刺すように強い眼差し。ただでさえ寝起きで働かない頭は、わずかばかり知っている思想家の名前すら思い出してくれない。意味をなさない呻き声が虚しく響くのに耐えかね、素直に「分かりません」と応える。それに対する反応は、盛大な嘆息がひとつ。

「あのね。大事なところだから、今やってるところ。現代思想の根本的なところであって、ベルナルド・アレクシアの思想はこの辺が分からないとまったく理解できないから。このままだと木ノ内くん、卒業できなくなっちゃうよ」

「す、みません」

「最近成績下がってるんでしょ、木ノ内くん。このまま下がっていくようなら、一度マクスウェル先生に言って、お兄さんを学校に呼ばなきゃだね」
「や！　それはちょっと……！」
大人しく謝っていれば済むだろうと楽観していたいばらは、予想外の展開に声を上擦らせる。動揺するいばらに対し、途端に色めき立つ女子生徒たち――木ノ内さんのお兄さんならあたしが会いたい！
「ちょっと、騒がしいよ」
自分で蒔いた種ながら、教師の表情が渋いものへと変わる。授業には相応しくない浮ついた空気を追い払うように咳払いを繰り返す。
「もういいから座って。じゃあ、木ノ内くんの代わりにとなりの、きみも授業真面目に聞いていなかったでしょ――」
先刻とは異なる緊張感が、たちまち教室中の空気を重くする。
「……あ？」
日本語としてはありえないが、母音なのに濁音がついて聞こえた。
もしこの若き教師が機転のきく男であったなら、すぐに視線を逆のほうに向けることで指名しなおすことができただろう。幸いにも窓から二列目にある木ノ内いばらの席には、両隣が存在している。直接名を呼んだわけではなく、「となり」とのみ指定したのだから、変更する機会はいくらでもあった。それでも、言葉を受けて顔をあげたその生徒の迫力に圧されてしまったため、教師は咄嗟に誤魔化すことができなかった。
剣呑な眼差しに無言で「自分か？」と問われ、教師は反射的に首肯してしまう。指から力が抜け、丸められていた教科書は元の形に戻りながら派手な音を立てて落下した。屈んで拾わないのは、先ほどのいばらと同じく、相手の眼力に気圧されて身動きがとれなくなってしまっているせいだろう。
（ごめん、ロビン・メイくん）
いばらが座ると同時に、隣席の男子生徒が立ち上がった。
ロビン・メイ――校内一の厄介者、と訳知り顔で言っていたのは

誰だっただろうか。今年の春に編入してきた彼は、あらゆる面で注目を浴びる人物であった。進級してからずっととなりの席であるが、いばらもろくに彼と話をしたことはない。そういえば、どういう声をしているのかさえ知らない。教師は授業中に彼を指さないからだ。彼が誰かに話しかけているのも、話しかけられているのも見たことがない。誰もが、まるで初めから彼が教室に存在していないかのように振る舞うのが常だった。

クラスで一番背が高いという彼を下から見上げると、迫力がある。いばらの同居人も彼と同じくらい高身長であるが、ただ立っているだけで怖いと思ったことはない。ロビンが元々まとう雰囲気のせいなのだろう。他の男子生徒と同じく深緑を基調としたブレザーを着ているのに、彼だけが妙に大人びていて浮いてしまっている。

教師とクラスメイトたちの関心が自分から隣席の少年に移ったことに安堵し、片手で器用に眼鏡を掛けつつ教科書をぱらぱらとめくる。自身が答えられなかった問いの正解が知りたかったのと、巻き添えになってしまった彼に助け舟を出してやろうと考えたのだ。しかしいばらが正解を教科書から見つけ出す前に、彼は口を開いてしまう。

「フリードリヒ・ウィルヘルム・ニーチェ」

気だるそうに首筋を撫でたまま、男子生徒は淀みなく答える。二色刷りの教科書の紙面に這わせていたいばらの指も、彼が告げた名前を見つけた。フリードリヒ・ウィルヘルム・ニーチェ――今からおよそ三百年前に活躍していたドイツの思想家。

（ええと、神は死んだ……と）

また指されては困るので、いばらは該当箇所を黙読する。

ニーチェらが活躍していたころから二世紀後の二一一九年、政治家でありながら社会学者でもあったベルナルド・アレクシアはこの両者の思想に大いに影響を受け、世界をひとつの統一された国家にする必要性を説いて統合国家共同体を設立した。国家福祉の瓦解を恐れるからナショナリズムが加熱するならば、絶対的な福祉を供給

する世界規模の組織が存在すればよい。その、地球上すべてを包括する、歴史上比類なき巨大な国の中でそれぞれの神々を敬愛すれば平和は訪れるだろう――じつに豪快な発想は、当初誰にも相手にされなかったという――だが、世界に彼の養子であるセア・サルベの存在が知れ渡ると、状況は一転した。

（あれ、セア・サルベって）

文字列をなぞっていた指を止める。

統合国家共同体が設立されたのは今から約半世紀前の話であるから、そのころの歴史に登場する人物となれば、現在ではかなり高齢のはずである。現に、ベルナルド・アレクシアは四〇年前に亡くなっている。けれど、セア・サルベという名は、最近、それも授業ではないところで聞いたばかりだ。いつだったかと思い出すまでもない。今朝、登校する前に見たニュースの中だ。しかも、アナウンサーがニュースを読み上げるだけではなく、当のセア・サルベの映像も流れていた。なんでも静岡県の伊豆半島で二日前に発生した地震の被災者への慰安に来日しているのだという。地震自体は事前に予知されていたため、死者はおろか軽傷を負ったひともいないらしい。

（若かったと思うんだけど）

テレビに大写しにされていたセア・サルベは、金髪が印象的な若い青年だった。テロップに名前と肩書きが表示されなかったら、有名な俳優かミュージシャンが慰安訪問をしているのだと思っただろう。

不思議に思いながら教科書を読み進めようとすれば、セア・サルベの名前に脚注があることに気がつく。欄外に目を向ければ、「以後、セア・サルベの名は統合国家共同体保安委員会総帥に就任したものが襲名するようになる。二二一四年に就任した現在のセア・サルベは三代目にあたる」と小さく書いてあった。疑問が解ける。

（それにしても、さすがだなあ。編入試験満点のロビン・メイ）

一通り読み終え、予習は十分だろうと教科書から目を離す。そうして、まだなにかと質問をする教師にぼそぼそと、けれど一度も口

ごもることなく答えるロビンを羨望の眼差しで見上げた。彼が注目されている理由のひとつを思い出し、先ほどの自分のお節介を恥じる。この学校の学力レベルは確かに進学校と呼ばれるほどではないが、それでも編入試験で全ての科目で満点をとることは難しいだろう。また、先ごろ行なわれた定期テストにおいても、ロビンは二位に大きな差をつけて一位を獲得している。教師に対して反抗的な態度を隠そうともしないロビンだが、成績だけを見れば彼は非常に優秀な生徒であった。

「ん、まあ、正解だ。ちゃんと授業は聞いているようだな」

年下の少年に気圧されていたことを誤魔化すように、教師は落下した教科書を何ごともなかったかのように拾い上げてパンパンとはたく。その教師を見下ろしながら、ロビンはふと思い出したように付け足す。

「綴り、間違ってんぜ。『Ｇｏｔ』じゃなくて、『Ｇｏｔｔ』だろ」

「……おや。書いたつもりだったんだけどな」

しかし教室の隅々から漏らされる忍び笑いを聞いてしまった教師は、そのまま黙って教壇に戻ることができなかった。再び教科書を丸め、腕を組むと、高圧的な態度でいばらを見下ろす。

「赤線出身者でも分かるような問題が解けないのは問題だぞ、木ノ内」

ぴたりと忍び笑いが止んだのは、露骨な教師の嫌味ゆえではない。同じく、いばらが冷や汗をかいたのも、そのためではない。

赤線出身者。それも、ロビン・メイという少年が注目されている理由である。

国の中にあって国ではない場所、すなわち「統合国家共同体内特別居住地区」のことを指す。役人が地図上に赤い線を引いて「区別」をすることからつけられた隠語であり、蔑みの意味が込められている。

隣席から漂う冷ややかな空気になぜ教師が気づかないのか。謝ることはおろか相槌さえ打てないいばらに、教師はますます八つ当た

りとしか思えない暴言を続ける。大体、赤線というのは崇高なるベルナルド・アレクシアの思想を理解できないものたちが住まう地域だ。次のテストで木ノ内の点が悪かったら、ぼくは保安委員会に通報しなければならないなあ――いばらに向けて言っている体を装いながら、攻撃の対象は明らかにロビン。

「言いたいことがあるなら、おれに直接言えよ」

着席を許されていなかった男子生徒は、不穏な気配を隠そうともしない。

「ああ、言ってやるさ。医者になりたいだかなんだか知らんが、赤線がこちら側の学校に通うなんざ、不快極まりないんだ」

教師も教師で、授業中であることなど完全に失念しているようだった。

まるで酔っ払いのけんかだ。

（ここが店だったら、両者にお冷をぶっかけてる）

しかし、不幸なことにここは教室である。彼らの目を覚まさせるためのお冷はどこにも存在しない。水を汲みにいく度胸など、いばらはない。

「確かホンハの出身だったな、きみは。医療大国などと言いながら、裏ではあんなおぞましい研究を行なっていた。きみもどんな医者になるのか分かったものじゃない。赤線は赤線らしく、ラインの中でおとなしくしていればいいだろう」

ホンハ。

それは口にすることさえ憚られる、地上から抹消された国。

がた、とすぐとなりから音が聞こえたのといばらが教科書を手に立ち上がったのは果たしてどちらが先立っただろうか。

「――！」

誰かが何かを叫ぶのが聞こえた。

けれど、いばらがその意味を把握することはできなかった。

分厚い教科書を盾にしてなお、受けた鉄拳の衝撃が凄まじかったからである。

足音が近付いてくると思った瞬間、がらりと扉の開く音が聞こえた。
消毒液臭い保健室の中、渡された氷嚢で頬を冷やしていたいばらは反射的に音のしたほうに顔を向ける。室内の様子が見えないように入り口付近には背の高いパーティションが置かれているため、普通ならば入室者の姿は見えない。が、今回は違う。パーティションよりもさらに頭ひとつ分、入室者の背が高かったためである。顔が妙にぼやけて見えるので眼鏡の位置を正そうとするも、食指は直に鼻に触れた。
（あ、壊れたんだっけ）
フレームがひしゃげて使い物にならなくなった眼鏡は、ケースに入れてかばんの中にしまってある。見えないことはないが、やはり遠くのものは見えにくい。予備の眼鏡はどこにしまっていただろう、とやり場のない食指を握りこみながら考えた。
「案内ありがとう。もう大丈夫だから」
いばらと一瞬目が合うも、その男はすぐに視線を下へと向けた。こちらからは見えないが、誰かいるのだろう。それが女子生徒たちであることは続いて聞こえた賑やかな返事で分かる。一体どれほどの女子たちを引き連れてここまで来たのだろうか。きっとまた噂が広まる――明日以降のことを考えると、憂鬱になる。
（この間も面倒だったのに）
先月行なわれた授業参観の翌日は、クラスといわず他学年の女子たちにまで話しかけられて大変だった。身内の趣味や誕生日を訊かれるぐらいならば構わないが、さすがに恋の橋渡しを相談されたときは相手の正気を疑ったものだ。
「お邪魔いたします、木ノ内の保護者です」
耳当りの好い低い声を響かせながら、パーティションを抜けて男が姿を見せる。

新たな来室者の容姿を一言で言い表すなら、「美人」に尽きるだろう。

凛々しい眉やすうっと通った鼻筋やすっきりとした輪郭など、ひとつひとつを見ていけば間違いなく男のものである。しかし、長いまつげが縁取る華やかでありながら涼やかな目許やバニラアイスのような白皙のため、たおやかな色気が仄かに漂う。高身長ではあるものの、身体の線がほっそりしているため厳つくはない。そして緩やかに波打つ漆黒の髪が首筋を流れるほどの長さであるため、ますます中性的な雰囲気を醸し出していた。おまけにシンプルな黒のセルフレームの眼鏡を掛けているので、理知的な印象も与える。一目見れば忘れられないくらい、鮮烈な印象を与える男だった。毎日見ているはずのいばらでさえ、時おり見惚れることがある。

モノクロボーダーのカットソーにモスグリーンのカーディガンと、ダメージデニムというカジュアルな出で立ちは、足元のスリッパを見ずとも彼が部外者であることを示していた。しかし、デスクに向かって淡々と仕事をしていた妙齢の養護教諭が息を呑んだのは、そのせいではないだろう。先ほど面倒くさそうにいばらに氷嚢を放り投げた人物とは思えない淑やかな仕草で立ち上がり、丁寧に礼をする。

「まあ、木ノ内さんのお兄さん？」

声が異様に高い。

いばらは左頬に氷嚢を押し当てたまま、「はあ」と曖昧に応える。

実際には、彼――つまり、猪川蓮太郎といばらには、血縁関係はない。身寄りのないいばらを五年前に彼が引き取り、保護者を務めてくれているというだけだ。同居しているのに名字が違うのもそのためである。いくら養護教諭が蓮太郎といばらの顔のパーツに共通点を探そうと見比べたところで、見つかるはずがない。けれど説明するのも面倒なので黙っておく。

「先に職員室に行って、先生にお会いしてきたよ。怪我したって聞いたけど、そこ？」

氷嚢を当てている左頬を指差しながら、蓮太郎が問う。
「怪我ってほどじゃないよ。もともと腫れもほとんどなかったし」
氷嚢を離して、頬を見せる。
「そう。殴られたっていうから、顔が変わってたらどうしようかって思った。眼鏡は？」
「壊れた」
声が小さくなったのは、別に蓮太郎に怒られるのが怖かったためではない。
「予備の、あのグラデーションになっているフレームもいばらに似合うから」
ふふっと軽やかに笑ってから、形の好い指を伸ばしていばらの頬に触れる。氷に冷えた頬に、彼の指は温かく感じられた。
「普段から殴られ慣れてるおかげで、咄嗟に防御ができたんだよ」
昔から美貌の保護者のせいで、いばらは自身の恋人がいたこともないというのに修羅場というものに遭遇することが多かった。おかげで、ひとが理性を失って暴力に走る瞬間というのを察知するのに長けている。まったくもって嬉しくない特技であるが、今回ばかりは感謝せざるを得ない。
「まあ！　お兄さま、ドメスティック・ヴァイオレンスを？」
いばらの軽口に反応したのは、蓮太郎ではなく養護教諭のほう。いつの間にか変わっている呼称について流すことはできたが、さすがに誤解は解いておくべきだろう。いばらは慌てて首と掌を振った。
「違います！　そういうんじゃなくて、そのうちの仕事の関係で、あの、酔っ払ったお客さんの相手をすることも多いので……！」
実際には事実とは異なるのだが、詳細に説明するわけにもいかないので誤魔化しておく。すると、養護教諭は心から安堵したように息をついて納得した様子を見せた。
「今日はもう早退してもいいと先生が仰っていたから、帰ろう」
「うん――あ、ちょっと待って。蓮太郎にお願いしたいことがあるの」

お願いって、と怪訝そうに呟く蓮太郎には応えず、いばらは椅子から立ち上がり、カーテンで仕切られている一画に向かう。それから断りもせず真っ白のカーテンを開け放った。現れた小さく簡素な造りのベッドの上には、不機嫌そうに顔を顰めて座っているロビン・メイ。つまり、いばらの頬を腫れさせた張本人がいた。目つきは教室にいたときと同じように悪いが、迫力はまるではない。意外にも殊勝な彼の態度に、彼に対して抱いていた怖さは薄れていく。また、兄代わりである青年がそばにいてくれていることもあって、臆することなくロビンの視線を正面から受け止められた。

「ロビンくん、大人がついていないと帰れないんでしょ？　いっしょに帰ろう」

発熱や怪我をしているわけではないので、付き添いがなくてもひとりで帰宅することはできる。それでもわざわざ保護者である蓮太郎に来校してもらったのは、このためであった。なんでも、ロビンはひとりで帰ってはいけないらしい――そう、教師たちが話していたのを聞いてしまったのだ。

「ああ？　てめえには関係ねえだろ」

素っ気無く言い放ってそっぽを向くが、刺々しさは失せている。

「関係あるよ。本を糺せばあたしが居眠りなんかしてたせいだもん」

「教師を殴ろうとしたのにてめえは関係ねえ」

「あるってば！　てか、あたしもイラッとしたから、逆にすっきりした」

「木ノ内さあん？　一応ここにも先生いるからね、あんまり教師の悪口言わないでくれるかなあ？」

苦笑しながら嗜めてくる養護教諭に、いばらは肩を竦めて見せた。

いばらの左頬が腫れているのは、ロビンの右ストレートを間接的に喰らったためである。度を過ぎた侮辱に耐えかねたロビンが教師を殴ろうとしたのを察し、咄嗟に教科書を構えてふたりの間に立ったのだ。教師を庇うためではない。いくら心無い暴言のせいとはいえ、教師を殴ったとなればロビンは退学になりかねない。それがい

やで行なったことであるから、加害者であるロビンを恨む気はない。むしろ、自分が居眠りをしていたことで彼が傷つけられたことが心苦しい。

「彼、保護者はいないんですか？」

それまで黙っていた蓮太郎が、養護教諭に訊ねる。

「ロビン・メイくんは特待生として、特区から来ている治外者なんです。妹さんとふたりで暮らしていて、こちらには親族はいないらしく……一応、担任のマクスウェル先生が身元引受人になる予定なんですが、まだ勤務時間ですから」

「ああ、なるほど」

蓮太郎は相槌を打ったが、いばらにはよく事情が分からない。

「なんでわたしはひとりでも帰っていいのに、ロビンくんはだめなんですか」

「彼の場合はちょっと事情が異なるのよ。『市民』に暴力を揮ってしまったから、統合国家共同体対治外者法第十七条の未成年の場合が適用され、五日間は自宅謹慎の身になります。ですから、今日を含め、五日間は成人済みの『市民』の付き添いがなければ外出することはできません」

なんと不条理な決まりごとだろう、と大人たちに背を向けたまま思う。

ふたりとも同じ学校に通う級友でなにも変わりはないのに、いばらはよくてロビンがだめなことがあるというのが腑に落ちない。とにかく、自分の巻き添えで迷惑を蒙っているロビンに申し訳ないという気持ちが強い。

「……変なの。ひどいのは先生のほうだったのに」

不満が知らず唇から漏れた。

「確かに、話を聞いていたらちょっとロビンくんは気の毒だと先生も思うわ。でも、どのような状況であっても力で訴える方法はだめ」

腕を組んだ養護教諭がため息をつく。

「あっちでは、それが普通だった」

反論のように、いささか憮然とした面持ちでロビンが呟く。拗ねた子どもが苦し紛れに発した出まかせとは違う、やや悲壮なニュアンスがあった。しかし彼に賛同することは、いばらにはできない。暴力が正当化される社会、というものがイメージできないためである。彼に下された厳罰に対して異議はあるが、彼が揮った暴力を肯定するのとはまた別の話である。同じ戸惑いを養護教諭や蓮太郎も覚えたのだろう、結局ロビンの言葉は黙殺される形となってしまった。悔しそうにロビンは唇を噛んで俯く。

「いばら」

肩を掴まれてベッドから離され、入れ替わりのように蓮太郎がロビンと対峙した。

「ロビンくん、っていうのかな。ぼくでよければお家まで送るけれど」

断りもなくロビンの座っているベッドに腰を降ろし、蓮太郎が優雅に小首を傾げて見せた。ロビンが剥き出しの敵意で相手を威圧するタイプだとすれば、蓮太郎は得体の知れない怖さを極上の笑みに託して相手を従わせるタイプだ。どちらも怖いことには変わらないのだが、蓮太郎はたおやかな美貌のおかげで一見しただけではそれとは気付かれないことが多い。妥協点を探すことなく自身の意を通そうとしているところは、ロビンも蓮太郎もそっくりだ。

「……あんたには関係ねえ」

さすがは、教師相手にも不遜な態度を崩さなかった男である。そばで見守るいばらは、胃のあたりが痛みそうなのを感じながら固唾を飲むことしかできない。

「へえ、面白いこと言うね？　ぼくでさえ手を上げたことのないうちのいばらを殴ってくれちゃったのに、関係ないって言うんだ」

相変わらず穏やかな低い声なのに、なぜか耳が凍えそうだ。

シスコンっぽいからやめてよ、という非難さえ喉に張り付いてしまう。

部屋の中には、アナログ時計の秒針の音だけがやけに大きく響い

ていた。あまりにも静かなので、いばらは思わずその音をカウントしだしてしまう。二十を数えかけたとき、ようやくわざとらしい咳払いが沈黙を打ち破った。
「まあ、冗談はさておき」
そう言って、蓮太郎がにっこり笑う。きっと鏡を見たら、いばらもロビンと同じく驚愕に目を見開いていたことだろう。冗談とは、笑えるものだったはずだ。
「いばらが迷惑を掛けたみたいだから、お詫びをさせて欲しいんだ。コーヒーと軽食ぐらいならご馳走できるから」
しばらく睨みあうように無言で見つめ合うふたり。
「……そこまで言うなら」
折れたふうを装っているが、ロビンのぎこちない表情は完全に蓮太郎の押しに負けたことを意味にしている。いばらもよく経験していることだから、ロビンの気持ちはよく分かる。すこぶる笑顔なのに、妙に怖いのだ。
(なあんだ、ロビンくんでも蓮太郎は怖いんだ。いっしょじゃない)
共通点が見つかれば親近感が湧く。
さきほどの殊勝な態度のこともあって、すっかり彼への怖さは消えてしまった。代わりに、もっといろいろ話してみたい欲求に駆られる。考えてみれば、となりの席になってから数ヶ月も経つというのに、彼のことをまるで知らないのだ。
「よかった！　じゃあ、帰ろうか」
嬉しそうに声を弾ませて、蓮太郎が立ち上がる。続いて渋々といった様子でロビンもベッドから降りた。長身でふたりとも癖のある黒髪であるから、並んで立つとまるで兄弟のようである。いつも無愛想で表情が怖いため気づかなかったが、よく見てみるとロビンも整った顔をしているのだ。少なくとも、いばらと蓮太郎が身内同士という事実よりはしっくりくるのではないだろうか――保健室に持ち込んでいたかばんを肩に掛けながら、蓮太郎とロビンを交互に見遣る。しかし当人たちはいばらの考えていることなど知る由もなく、

互いに尻のポケットから携帯電話を取り出して操作をしだす。
「メアド交換？」
「ちっげえよ」
いばらの疑問を即座に否定したのは、ロビン。忌々しげに舌打ちするほど、いばらの質問は彼にとって不快なものだったらしい。手負いの獣さながらに敵意むき出しで睨んでくるものだから、思わず蓮太郎の背後に隠れる。
「さっき先生も仰ったけれど、治外者が『こっち』で違反をすると、ペナルティがついてしまうんだよ」
怯えるいばらを宥めるように微笑んでから、「ほら」と、携帯電話のディスプレイを見せてくれた。そこには、「不法滞在者の身元引受人になりますか？」とある。
「治外者がこっちにくるときには在留資格――ロビンくんの場合は就学、かな――が必要なんだけど、ペナルティがつくと、一時的に資格が剥奪されて、不法滞在者の扱いになるんだ。携帯のＧＰＳで居場所が逐一保安委員会に報告され、許可されていない場所にいることが分かると逮捕されてしまう。今の彼はコンビニにも行けない」
「え？　じゃあ、ご飯とかどうするの？」
いくらなんでも、五日分の食料が彼の家に備蓄されているとは思えない。
「一応、成人してる『市民』が身元引受人になってますよ、っていうのを保安委員会に伝えておけば、同伴している場合に限って出歩くことは許されている」
こうやってね、と言うが早いが、蓮太郎はロビンの携帯電話の上に自分のものを翳した。短い電子音がしたかと思えば、画面に新しいメッセージが表示される。
「これで、ロビンくんはぼくといっしょなら学校から出られるよ」
「……ありがとう、ございます」
ぎこちなく礼を述べるロビンはやけにかわいかった。
また、彼に対する印象が塗り換わる。

「どういたしまして。じゃあ、今度こそ帰ろうか」
お世話になりましたと部屋を出る前に蓮太郎が挨拶をすれば、またいらしてくださいねと上擦った声で返された。保護者である蓮太郎が保健室に来るのはいばらの身になにかあったときだから、正直それは勘弁願いたい。しかし、養護教諭の意図に気付いているのかいないのか、蓮太郎は急に畏まって深々と頭を下げた。
「お転婆な子ですから、またお世話になることもあるかと思います。頑張り屋なのはいいんですが、どうもそそっかしいところのある子でして、この間も……」
「もう！　やめてよ、蓮太郎ってば！」
誰も訊いてなどいないのにいきなりいばらの失敗談を披露しようとするもだから、慌てて大声を出してかき消す。他意がないのは分かっている。ただ、この兄代わりの青年は過保護すぎるきらいがあるのだ。だから困る。蓮太郎が心からいばらを案じてする発言のすべてが、当のいばらには恥ずかしくてしかたがない。この年になってもまだ兄離れできていないのかと思われるのも耐えられない。
さっさと出て行けとばかりに蓮太郎の大きな背中を掌で押して追い出してから、養護教諭に改めて挨拶をしようと向き直る。恥ずかしいところ見せちゃってすみません、と肩を竦めて謝罪すれば、養護教諭は両手を大仰に振ったジェスチュア付きでそれを否定した。
「優しくて素敵なお兄さまね……」
うっとりと、同じく廊下に出ていたロビンと何ごとか言葉を交わしている蓮太郎を熱っぽい瞳で見つめながら妙齢の女教師は呟く。色の白いのは七難隠す、と昔のひとは言ったというが、その中には性格も含まれていたのだろうか。
（いやいやいやいや、無理だって）
ばかばかしくなって、いばらは適当な挨拶を告げて保健室を出た。

＊

道中は不機嫌だったロビンだが、食事が出た途端に表情を明るくする。
半ば強引に連れてきたという後ろめたさが、いばらの中から幾分か和らいだ。
「おまえンち、飯屋なの？」
一軒家の一階を改装した店内を見渡しながら、初めてロビンのほうから話しかけてくれる。先ほど出したハムとトマトのサンドウィッチは、すでに皿から消えていた。もうひとつ食べるかと訊けば、照れたように笑って頷く。
「飯屋っていうか、カフェね。夜はお酒も出すからカフェ・バー」
カウンターの中で作業をしていた蓮太郎におかわりを告げれば、了解とばかりに小さく微笑む。カウンターが七席にテーブルが三席しかない小さなカフェの従業員はいばらのひとりのみ。オーナーである蓮太郎が自ら調理を担当し、いばらは接客や簡単なドリンクの作成を担当している。三年前にオープンして以来、大盛況というほどではないにしろ、幾らかの常連客もついて繁盛していた。「ネオ・カフェ」と言えば、この近隣ではわりと名の知られている店である。おかげで授業中に居眠りをしてしまうほどには忙しい。
「気に入ってもらえて嬉しいよ」
そう言って、カウンターから出てきた蓮太郎がサンドウィッチの載った皿をロビンの前に置いた。礼もそこそこにロビンがかぶりついたのは、男性の掌よりやや大きいサイズのフランスパンのサンドウィッチ。香ばしいパンを噛み千切ったロビンが目を丸くしたのを見て、いばらはあることに思い至って慌てた。
「蓮太郎！　そのメニューは初対面のひとにはだめって言ったでしょ！」
それからすぐにロビンに食べるのを止めるように言うのだが、驚いた顔のまま同級生である少年はフランスパンをどんどんかじっていく。そうして、瞬く間にパンは彼の胃袋へと消えてしまった。
「へ、平気だった？」

恐る恐る訊ねれば、ロビンはそんないばらに不思議そうな表情を向ける。
「すっげえうまかったよ。懐かしくて、ちょっと驚いちまったけど」
「懐かしい？」
「うん。おれ、すげえこれ好き。お兄さん、ありがと」
どういたしまして、とばかりにカウンターに戻っていた蓮太郎は満足そう。
ネオ・カフェで普段提供している軽食は、どこのカフェにでもあるようなサンドウィッチやオムライスやパスタやサラダである。しかし、蓮太郎自身が得意としているのはここ日本では好き嫌いがはっきり分かれるアジア料理――主にヴェトナムの料理であった。先ほどロビンが食べたフランスパンの中身は、おそらくはヴェトナム風ハムに香草となますや唐辛子、玉ねぎ、それにたっぷりのナンプラーという、初めて食べるにはちょっと癖の強いものだったはず。実際、いばらはヴェトナム風サンドウィッチがあまり好きではない。
（いやがらせ、とかじゃないよね）
納得できないまま、氷水の入ったグラスをロビンに差し出す。
当事者である自分でいうのは恥ずかしいが、蓮太郎はいばらに対して甘い。血縁はないのだが、俗に言う「シスコン」の域だ。先ほどの保健室でちらりと見せた剣呑な態度のこともあって、邪推してしまう。
「ホンハは、ヴェトナムから生まれた国だから」
そんないばらの様子を察してか、ロビンが小声で囁いた。理解が弾ける。
三世紀前に終結したヴェトナム戦争ののちに大量に発生したヴェトナム難民は、かつての宗主国であるフランス、あるいは戦争に大きく関与したアメリカへと渡った。新天地に移住した難民たちは、逆境に耐えながらホスト社会で生き抜き、世代を重ねるごとに次第に多くの成功者を輩出するようになる。そのころには、彼らを難民と呼ぶものたちはいなくなっていた。彼らは難民ではなく――中華

系移民たちがそうであるように――越僑となったのである。
今から半世紀前、ヴェトナムは統合国家共同体への参加を渋り、国際社会から疎外されつつあった。すでにルーフに参加していた近隣諸国との外交関係が一気に絶たれてしまい、数万人の餓死者を出すほどの困窮を極めたという。越僑たちは貧困の淵に立たされていた本国ヴェトナムの状況に付け込み、首都であるハノイ近郊を金で買い取り、自身らの国と定めた。国名であるホンハは、買い取った土地に紅河が含まれていたことに由来する。
金で買い取るというやり方には賛否両論あったものの、ホンハがルーフへの参加表明をしたことによって反対派は口を噤まざるを得なかった。飢えに苦しんでヴェトナムから逃げ出すひとびとを手厚く保護する人道的な行動も、建国が前向きに評価された理由のひとつである。その後ヴェトナムもルーフに加盟することになったが、すでに医療先進国として確固たる地位を築き上げたホンハを吸収することは叶わなかった。
ホンハはヴェトナムとルーツを同じにする。
食文化が似ているのも道理だ。
「マイアに食べさせてやりてえな」
グラスの水を飲み干してから、ロビンが独り言つ。
「マイア？」
明らかに女のものと知れる名に、いばらは興味を持った。
「妹。いっしょに住んでんだ。妹なら、留学についてきてもいいって言われたから」
あいつも、ホンハの食べものはしばらく食べてないから。
兄というのはみな妹に対して優しいものなのだろうか。昨日までは怖い人物だと思い込んでいたロビンの、意外にも柔らかい表情にいばらは面食らう。
「だったら――」
「包んであげるから、持って帰るといいよ」
それまでカウンターの中にいたはずの蓮太郎が、エプロンを外し

た姿で立っていた。手にはフランスパンのサンドウィッチが載った皿。
「コーヒークリームがきれていたのを忘れていたから、買出しに行ってくるね。ついでにパンも買ってくるから、ちょっと待ってて」
言うなり店から出て行こうとするのを、慌ててロビンが引きとめる。
「え？　いやあの、悪いし、いいっすよ」
「きみの食べっぷりは見ていて気持ちよかったしね。いばらは、ぼくがヴェトナム料理を作ってもまずそうに眉間にしわを寄せながら食べるんだ。だから普段はあまり作らないんだけど、喜んでくれるひとがいるなら腕を振るいたいな、久々に」
ね、と見せてくれる極上の笑顔の迫力と言ったら。
ロビンは困ったようにいばらに目配せをするも、全面的に蓮太郎に賛成するいばらは素知らぬ顔で視線を逸らす。ややしてから、ロビンは「じゃあ、お願いします」と消え入りそうな小声で呟いた。対する蓮太郎は嬉しそうに、「任せて！」と意気揚々と店を出て行く。何度見ても、蓮太郎に圧倒されるロビンの図は面白い。くくっと思わず笑ってしまえば、ロビンに睨まれた。だが、もう怖いとは思えない。むしろそれが照れ隠しなのだと分かるから、ますますいばらは頬が弛んでしまう。
「ロビンくんも蓮太郎が怖いんだね」
「ち、ちっげえよ！」
けれど狼狽は隠しきれていない。あははは、と耐え切れず声を出して笑えば、ロビンは居心地悪そうに視線をあさってのほうに向けた。
「知り合いに似てんだよ、おまえの兄ちゃん」
「うへえ。それは災難だね。蓮太郎みたい知り合いが他にもいるなんて」
どのような共通点がロビンの知り合いと蓮太郎にあるのかは分からないが、外見にしろ内面にしろ、どこかひとつでも似ているとこ

ろがあるのならば非常に厄介な人物であるに違いない。
「……変な兄妹だな、おまえら」
観念したように息をついて、ロビンが空のグラスを所在なさ気に掴む。
「蓮太郎はそうだけど、わたし、名前以外で変だって言われたことないよ」
「十分変だろ。ふつう――」
一旦言葉を区切り、躊躇を見せる。
怪訝に思って小首を傾げれば、ロビンはくせのある黒髪をがしがし掻いた。
「ふつう、赤線の人間には近付かないだろ」
教室で若い男性教師がロビンに向かって吐いた蔑みが生々しく思い出される。そんなことない、とは簡単には言えなかった。教師だけが特殊なわけではない。現にいばらは彼と言葉を交わしたのは今日が初めてだった。同じクラスでとなりの席なのに、彼の声すら知らずに数ヶ月過ごしていたのである。ロビンが積極的に話しかけなかったから、と彼の責任にするには容易い。けれど、そうではないことは分かっている。ロビンはけして怖いひとではない。こうしてきちんと対峙すれば分かること。彼を「怖いひと」に仕立て上げたのは、赤線の人間という先入観だ。だから、誰もが彼を怖がって遠巻きに眺めていた。その気配を察しているからこそ、ロビンもまた彼らが望むように口を噤んでいたのだろう。
「蓮太郎がね、よく言うの」
椅子の下においていた通学かばんからペンケースを取り出し、ボールペンを一本抜き出す。そうして、テーブルの端に置かれているペーパーナプキンを一枚取った。
「お客さまは神さまってね、商売の基本だって。だから、お客さまは大事にしろって」
店名入りのペーパーナプキンに、いくつかの数字を書き出す。
「そのお客さまっていうのは、来店してくださったひとだけを指す

んじゃないの。未来のいつか、店に来てくださるかもしれない方も含めて、お客さまなの」
誤りがないことを確かめてから、ナプキンをロビンに差し出す。
「ロビンくんと妹さんは、うちの常連になってくれるんでしょ？」
冗談交じりに告げれば、ロビンが目を瞬かせた。
そうして、ナプキンの数字の意味に気づくと、やはり同じように瞬きをする。
「お医者さんになってからの出世払いでいいから。いつでも連絡して。出来立てのネオ・カフェ特製サンドウィッチをいつでもデリバリーするよ」
虚をつかれたような顔をしたものの、ロビンは何も言わなかった。ただ、とても丁寧な手つきでナプキンを折ってブレザーの内ポケットにしまったから、きっと言いたいことは伝わったのだと思う。
「そだ。コーヒー淹れるね」
立ち上がれば、椅子を引いた音に紛れてロビンが何かを言う。きちんと耳には届かなかったが、どこか不機嫌そうに頬杖をついた彼が何を言ったのかは予想できる。だからいばらは湧き上がる気持ちそのままを笑顔にして応えた。

第二章

広い庭の片隅で石を蹴っている少年を、窓からそっと伺う。
つまらなそうな顔をして、赤毛の少年は己が蹴り飛ばした石の行く先を見つめていた。石が植木に飛び込んで見えなくなると、少年は唇を尖らせて、また新しい石を探すように周囲を見渡す。けれど手頃なものが見つからないのか、ふと顔をあげた。
ガラス越しに目が合う。
盗み見していたことを知られた恥ずかしさを取り繕うように、慌てて手にしていた文庫本に目を落とす。日本語で書かれたそれは、世界の歴史を女性の観点から綴られた本である。美人として名高かったクレオパトラ、楊貴妃、英雄として戦ったジャンヌ・ダルク、科学者として有名なキュリー夫人やヴァネッサ・リー。中でも特に興味を惹いたのは、紀元前に祖国を守るために立ち上がった徵姉妹の話。もう何度も読み返したページを、一言一句味わうように目で読む。
（お姉ちゃんとあたし、双子だったらよかったのに）
徵側と徵弐は双子の姉妹。
女王となった姉の側を、弐は健気に支えたという。
ぴったり同い年であったなら、きっと自分もそうあれた。姉や両親の許に残って、役割を果たすことができただろう。けれど幼いからという理由で、自分だけが遠ざけられた。母の育ったこの国に、たったひとり連れてこられた。
「いばら」
扉が開くと同時に、名を呼ばれる。
振り返れば、スーツを着た男が立っていた。父よりは若いが、姉よりは年上のお兄さん。でも、いばらの世話をしてくれるこの施設のどの女性よりも美人だから、ときどき間違えて「お姉さん」と呼びそうになる。

「本、読んでたの」
彼は、いばらをこの施設まで連れてきてくれたひと。そして、たまにこうして会いに来てくれる。姉や両親に会いたくてしょうがなくて泣きそうになると、まるでテレパシーで通じたように彼が姿を現す。
「うん。いっぱい勉強して、早くお姉ちゃんの役に立てる大人になるの」
ちらりと窓の外に目をやると、赤毛の少年はもうこちらを見ていなかった。石を蹴ることに飽きたのか、鉄棒で逆上がりの練習をしている。太陽は燃えるように赤く、鉄棒と少年の影は怪物のように長く伸びていた。
「偉いね、いばら」
いばらの傍らで屈んだ青年が、形の好い指で前髪を払ってくれる。姉はなにかあるとすぐにいばらをぎゅっと抱きしめてくれたから、少し物足りない。姉の柔らかい身体が恋しかった。ふんわりと漂うお香の香りが思い出される。
「偉くないよ。だって、当たり前だもの」
本当に偉かったら――きっとここにはいなかった。いつまでも家族のそばにいることができただろう。ひとりきりになってしまったのは、いばらが未熟だからだ。役に立たないからだ。だから価値がないと見なされ、遠くに追いやられた。
役に立たないから、必要とされない。
ひとりぼっちになる。
いつかに抱きしめてくれた姉の体温が甦る。
姉に会いたい。父母に会いたい。本当は本なんて読みたくない。今すぐにでも自分の本当の家に帰りたい。そうして、笑顔で「おかえり」と迎えられたい。願い事は、けれど彼には言わない。誰にも言わない。弱い子だと思われたら、ますます姉たちから遠ざかるような気がしていたからだ。
「もうすぐ、迎えに来るよ。お姉さんも、きみに会いたがっている」

青年が微笑んで、いつの間にか眦に溜まっていた涙を指で拭ってくれた。
「……本当？」
しゃくりあげそうなのを必死に堪えて、いばらは問う。
「ぼくがいばらにうそをついたことはないだろう？」
困ったように肩を竦める青年に、いばらは素直に頷く。また来てねと言ったら、何度でも会いに来てくれた。本が欲しいといったら何冊も持って来てくれた。
「夏になったら、向こうも落ち着くから。そうしたら、帰れるよ」
それから、優しく頭を撫でられた。
涙はすでに止まっている。
彼が言うと、すべて事実になるような気がした。
冬は始まったばかりだけれど、夏まできっと自分は待てるだろう。ひとりぼっちなのは変わらないが、それに終わりがくるのだと分かった瞬間、寂しさは消えた。
「それまでに、いっぱい勉強する」
泣いたことへの照れ隠しにえへへと笑えば、青年は柔らかに目を細める。

――けれど、約束の夏は来なかった。

繰り返されるアラーム音を、掌でストップさせる。
がしゃん、という痛々しい音を残して、目覚まし時計は沈黙した。大人しくなった時計を眼前に引き寄せ、いばらは針の位置を確かめる。短針は七の文字、長針は十二の文字に重なっている。七時かあ、と寝ぼけた声で呟いてから、布団を跳ね除けた。
「七時って！」
慌ててパジャマを脱ぎ捨て、部屋着用のジャージに着替える。顔をこすりながら、ベッドのサイドテーブルに置いていた眼鏡を掴ん

で部屋を出た。階段を降りる前に同居人の部屋の前を通ったが、相変わらず物音はない。舌打ちしそうになりながら、飛ぶように階段を降りていく。あえて足音を響かせるのは、まだ就寝中の同居人に対するいやがらせだ。自分の店のことなんだから、ちゃんと起きろっての！

一階からは店のスペースになるため、階段の下で下履きに履きかえる。細い通路を進んでフロアに入れば、暗いはずの店内がすでに明るかった。昨夜閉店の際に消灯し忘れたのだろうかと不安に思うも、そうでないことはカウンターの中から聞こえる物音で知る。ひょい、と覗き込めば、冷蔵庫の前で屈んでいる背中が見えた。その周囲にライトブルーのケースが積まれていることから、牛乳の在庫を補充しているのだと分かる。ざっと目測したところ、毎朝業者が運んできてくれている分量すべてをすでに冷蔵庫に移し替えてくれているようだ。

「……ヒバリさん？」

声を掛ければ、ミディアムボブの髪を揺らしながらその人物は振り返る。

「あ、いばらちゃん。おっはよー」

快活な挨拶とともに、軽やかな仕草で立ち上がる。

くすんだピンクの七部丈カットソーに、ゆるっとしたボーイフレンドデニム。動きやすさを重視した恰好なのだろうが、スタイルがよいため様になっている。すでに化粧も終えているらしく、寝起きそのままで彼女と対峙することに気後れがした。

「早いね？　学校何時からだっけか」

空のケースを重ねながら、年上の女性は朗らかに問う。一気に五つ重ねて運ぼうとするものだから、慌てていばらは上から三つを取り上げた。前が見えないまま手狭な店内を歩くのは、経験上、危険だというのを知っている。

「ありがと！　後ろの駐車場のとこに運ぶんだよね？」

「ええと、はい」

ぎこちなく応えて、先導するようにいばらは歩き出す。
「牛乳の補充と、コーヒー豆の準備、エスプレッソマシンの準備、それと、パンとかクッキーも陳列ケースに並べておいたよ。今から日替わりメニューの黒板書こうと思ってたところ。他になにか見逃してることってある？」
「いえ、大丈夫です。アイスコーヒーは昨夜作っておいたのがありますし」
「そっか。じゃあ、あとは店内を軽くお掃除したらオッケーかな」
駐車場に出るために裏口の戸を開ければ、眩しい朝陽に目が眩みかけた。顔を顰めて、定位置にケースを置く。いばらより少し背の高い彼女も、それに倣った。
「しばらく運動不足だったから、いい汗かいちゃった」
笑って、ヒバリは手の甲で額を撫でる仕草をしてみせる。
すべてをさらけ出す白日の下にあっても、彼女の外見に対する感想は変わらない。端正な造作ではあるが、浮かべる表情のせいか、まだあどけなさを残す。丸く頬に載せられた淡いピンクのチークも、彼女を可愛らしく見せている要因だろう。何年か前に好きでよく見ていた再放送のドラマに、彼女にとてもよく似た女優が脇役で出ていた。彼女の容姿を好ましく思うのは、いばらだけではないだろう。
赤羽ヒバリ、というのが彼女の名だ。
まだ自室で惰眠を貪っているだろう蓮太郎の、高校時代の後輩である。彼女は何ヶ月かに一度、思い出したようにネオ・カフェに現れては数日間滞在し、来たときと同じように唐突に出て行ってしまう。名が示すとおり、まさに渡り鳥のようなひと。どこに住んでいるのか、なんの職業に就いているのか、いばらは知らない。訊ねようとすると、のらりくらりとかわされてしまうのだ。
「あとはあたしがやっておくから、いばらちゃんは学校の準備してて？」
店内に戻り、掃除用具を取り出そうとするいばらにヒバリが言う。
「いえ、ヒバリさんがいっぱい手伝ってくださったから、これぐら

いは」
「いやいや、先輩からも言われてるし。いばらちゃんは学業優先」
言うが早いか、いばらよりも素早くほうきとちりとりを取ってしまう。仕方なく、いばらは顔を洗うために洗面所のある二階へと戻ることにした。手持ち無沙汰というか、妙にすっきりしない気持ちが胸中にわだかまる。
昨夜も、赤羽ヒバリはなんの前触れもなくネオ・カフェに現れた。
大きなリュックサックを背負っただけの姿は、バックパッカーか家出娘である。相変わらずと言えば相変わらずのヒバリを、いばらも笑顔で出迎えた。しかし、カウンターの中で料理をしていた蓮太郎だけは、いつもと異なっていた。ヒバリがカウンターでお気に入りのカプチーノを飲んでいると、珍しく神妙な顔をして彼女に話しかけたのである。つまり、しばらくうちに住み込んで働かないか、と。
驚いたのは当人のヒバリだけではない。給仕していたいばらも、馴染みの常連客も驚いて一斉にカウンターに目を向けた。
小さな店であるからと、オープンして以来、ネオ・カフェでは従業員を募集したことはない。蓮太郎目当てでアルバイトを志願する女性も多かったが、それらのすべてを蓮太郎は一言の下に却下した。いばらは身内であるから多少は緩和されているが、別の女性スタッフが入ろうものなら、やっかみがすごいだろうことは誰にでも予想できたからである。現に、蓮太郎と親しくなることを目的に頻繁に来店してくれる女性客たちが店内で水を掛け合うなんて珍しいことではないのだ。
蓮太郎は自身の優れた容姿に対して無頓着ではあるが、さすがに周囲にどのような影響を及ぼすのかは分かっている。だから、ネオ・カフェが地元の情報誌に取り上げられるようになって忙しくなっても、他に従業員を雇うことはしなかった。
それが、どうして今さら。
ヒバリが当惑しながらも「先輩のお役に立てるんでしたら」と承

諾したのを聞きながら、いばらはあることに思い至る。先日の、学校での出来事である。いばらが授業中に居眠りをしていたため惹き起こしてしまった、ちょっとした騒動。きっとあのとき、蓮太郎は担任の教師から、いばらの成績が低下していることを聞いたのだろう。実際、閉店したあと、ヒバリを交えた三人で今後の役割分担について話したとき、蓮太郎はいばらに言った。これからは学業を優先しなさい、と。以降、平日は一切店を手伝わなくてもいいから、とも言われた。

蓮太郎はいばらには優しいが、同時に厳しくもある。淡々と決定事項を告げる様子からは、どう言い募っても彼の考えが翻らないことが伺えた。

（なにやってんだろ）

階段を昇りながら、心中で独り言つ。

ネオ・カフェは八時から開店する。そのため、六時半から準備をしないと間に合わない。いつもなら目覚ましは六時に鳴るようにセットしている。それが七時になっていたのは、いばらのミスではない。昨夜、自分でそうセットしていたのだ。すっかり忘れていたことを思い出し、慌てて一階に下りてきたことを恥ずかしく思う。

（だからあんな夢、見たんだ）

起きて間もないから、まだぼんやりと思い出せる。

蓮太郎に引き取られる前、孤児院にいたときの記憶。

「……また、役立たずになっちゃったな」

絡まった髪に五指を通しながらぽつりと漏らす。

清々しい朝を知らせる鳥の声に、漏らした呟きはかき消される。

＊

「赤羽ヒバリさんって何者なの！」

案の定、というべきか。

ネオ・カフェに新しい従業員、それも女性が入ったという話はす

ぐに広まった。ヒバリが働き始めて、三日目のことである。
一時間目の国語が終わり、さて次の授業の準備をしようと立ち上がりかけたいばらは、机の周りに集まった女子生徒たちに肩を竦めた。同じクラスの女子もいるが、話したことのない別のクラスの女子、さらにはリボンの色から別学年と知れる女子もいる。見目麗しい身内を持つと、どうやら彼がいない場所でもこうして被害を蒙ることがあるらしい。教室中の好奇の視線が集まるのを鬱陶しく思いながら、いばらはなんと答えるべきか迷う。
「高校のときの後輩、らしいよ」
考えた末に口に出したのは、当人たちから直接聞いた事実のみ。それ以外のことなど、いばらは知らない。けれど彼女たちが知りたがっているのはそのことではないと分かっているから、困惑してしまう。
（わたしのほうが知りたいよ）
八つ当たり以外のなにものでもない憤りが、胸中に湧き出す。
「そんなのとっくに知ってるってば！　知りたいのは、どうしてその後輩が住み込みで働いてるかってことよ！」
さすがに顔見知りではない生徒は遠慮してか、同じクラスの女子がリーダー格となっていばらにきつく問う。家の事情を不躾に訊ねられることにむっとするが、蓮太郎の口癖である「お客さまは神さま」を思い出して堪える。
「人手が足りないから、じゃない？」
「でも今までやっていけていたじゃない。バイトだって断ってたし」
「ヒバリさんは蓮太郎目当てじゃないからじゃない？」
誰かさんたちと違って。
苛立ちが、刺々しい返事を生み出す。意外にもそれは彼女らの賛同を得る答えだったようで、ばつが悪そうにみな口ごもってしまう。それで話は終わりだろうと決め付けて今度こそ準備のために立ち上がろうとすれば、よかったあ、という場違いなほどに嬉しそうな声が聞こえた。驚いてそちらを見れば、下級生の女子が心底安堵した

ように口許を綻ばせている。
「じゃあ、結婚するってわけじゃないんですよね？　店長さん目当てじゃないなら、ふたりは恋人にはならないんでしょう？」
なるほど、そういうことか。
彼女の前向きな考え方に、それまで殺気のようなものまで漂わせていた女子一同の空気が和らぐ。安心したらしい別学年、別クラスの女子たちは足取りも軽く教室から出て行く。呆気にとられるいばらに、けれど未だ立ち去らない同じクラスの女子たちはぐっと詰め寄ってきた。
「本当に？　店長さんの恋人じゃないの？」
「……違う、と思う」
歯切れが悪くなるのは、確証が持てないため。
蓮太郎とヒバリはとても親しい。けれどその親しさが友人としてのものなのか、男女としてのものなのか、いばらには分からない。蓮太郎と初めて出会ってから七年、ともに住むようになってから五年が経つが、ヒバリ以外の人間が遊びに来たことはなかったからだ。蓮太郎は自身も天涯孤独の身らしく、それでいばらの境遇に同情して引き取ってくれたのだといつかに教えてくれた。だから、蓮太郎の親戚には会ったことがない。常連客と親しそうに話すことはあるが、あくまでそれは客と店員という線引きの上で行なっていること。猪川蓮太郎という個人で付き合いがあるのは、ヒバリだけだ。そのため、比べる対象が他にない。
「はっきりしないなあ、もう」
苛立だしげに言われ、いばらは戸惑う。
「店長さんだっていい年でしょ？　そりゃあ、恋人のひとりやふたりいるよね」
別の女子が、心底残念そうに言う。
「案外、結婚前提のお付き合いなのかも。夫婦でカフェやってくとか」
「うわあ、あり得る」

はしゃぐ彼女たちに、ふといばらは違和を覚える。彼女たちが楽しそうだからだ。蓮太郎のことが好きなら、その想像は心が痛むものではないのだろうか。

「だってさ、やっぱりあたしたちじゃつりあわないじゃん？」

「そうそう。店長さん大人だし、すっごいかっこいいから、どうせならつりあうひとと付きって欲しいよね。なんていうか、並んだときに目の保養になるぐらいの。悔しい！　じゃなくて、ああもうしょうがないな、分かる分かる、って納得できちゃうような相手」

そう思うでしょ、と同意を求められ、いばらはリボンをいじりながら形ばかりの首肯をする。心の奥では、彼女たちのように思うことはできていない。別に、いばらは蓮太郎に恋愛感情など持っていない。蓮太郎といばらは法律上では親子なのだ。いくら兄妹のように気安い関係でも、互いを呼び捨てで呼び合う仲でも、いばらは蓮太郎の養子なのだ。だから、蓮太郎と恋人になりたいと考えたことはない。いつかは彼も誰かと結婚するのだろうと、考えたこともある。けれどそれは、遠い遠い未来の話だ。

シスコンと悪態つきたくなるほどに過保護な蓮太郎。

彼が、自分以外の誰かを家族にしている姿など、想像したくない。

「……ヒバリさんは、お似合いかな？」

我ながら性格が悪いと思いながら、否定を望んで訊ねる。

しかし級友たちは顔を見合わせ、あらかじめ打ち合わせをしていたかのような仲のよさで一斉に「ぴったり！」と声を合わせた。

「正直さ、初めてヒバリさん見たとき、ああ、そりゃあ店長さん、誰にもなびかないわって思ったよ。お似合いすぎてびっくりした」

「うんうん。なんか似てるよね。顔とかじゃなくて、雰囲気ってのかな」

ね、と顔を見合わせると、うんうんと周囲の女子たちも同調する。

「なんか種類が違うっていうかさ。同じ花でも、うちらはタンポポとかシロツメクサなんだけど、ヒバリさんはガーベラとかユリとか、そういう感じ。そこらへんの道端に生えてるんじゃなくて、ちゃん

とした花屋さんに行かないと手に入らないっていうか」
「わかる！　店長さんがバラだとしたら、ヒバリさんはユリって感じ。いっしょに生けるとさらに華やかでいい感じになりそうなんだよね。でもふつう、バラとタンポポをいっしょに花瓶に生けないでしょ。そういう感じなのよ」
バラとユリ。
確かに、ふたりを花に喩えるならそうだろう。一方のいばらはどうだろう。名前の響きに「バラ」は入っているが、誰もが敬遠する棘のほうだ。花を生ける際には切り落とされることもある。つりあうはずなどない。
「あ、そろそろ授業始まっちゃう」
言いたいことだけを言って、女子たちはさっさと席に戻る。いばらも授業の準備をしなければならないことを思い出し、廊下にあるロッカーに向かう。そこから、次の授業である思想史に必要な教科書や資料集を取り出した。
（思想史か）
そういえば、となりがまだ空席なのだ。
廊下から教室に戻って自身の席に向かいながら、一週間ほど前のことを思い出す。先週、思想史の授業で居眠りをしていたいばらのせいで、隣席のロビン・メイは停学処分を受けた。五日はすでに過ぎているから、そろそろ登校してきてもよいはずである。それなのに、ロビンは学校に来ない。店に来ることもなかったし、いばらの携帯電話に彼から着信があったこともない。元気だろうか。マイアという妹と、ごはんはちゃんと食べているだろうか。連絡してみたいが、あちらの番号は知らない。
着席して、机の中からノートを取り出す。教師が入ってきたのはそのとき。彼が教壇に立つと同時に、チャイムが鳴った。結局、休み時間だというのに息をつくこともできなかった。頬杖をついて、開いたノートに黒板の文字を書き写す。
「そういえば、みんなニュース見たか？」

二一二三年に科学者であるヴァネッサ・リーによって始められた反文明改革の説明を記述していた教師が、思い出したように手を止めて振り返る。教師の視線がいばらの横の空席に、一瞬だけ向けられた。そして不在と知るや、安堵したように表情を和らげて続ける。いやな予感がした。

「逃亡していたホンハのお姫さま、捕まったな。これで、あのテロリスト国家もやっと終わりだ。いやあ、禍根は残しておくとあとで厄介だからなあ、意外と早く捕まってホッとしているよ。あとはハナザワ・ヒオさえ捕まれば、ホンハ事件も無事決着だ」

シャープペンシルの芯がぽきりと折れる。

いばらは俯いたまま、顔があげられない。

「日本で捕まったんでしたよね、おれ、ちょっとびびった。すれ違ってたかも」

授業が億劫なのか、雑談で話を長引かせようと生徒たちの何人かも話題に便乗する。五年前のホンハ陥落の際、保安委員会の目を潜り抜けて生き延びていたというホンハ王族の生き残り。当時まだ十歳をいくつか越えたばかりだったという彼女は、ホンハという国が持つドラマ性と相まって、世界中から注目されていた。反ルーフ組織、特に元ホンハ国民たちからは希望として敬われていたという。

そんな大きなニュースをどうして自分は知らなかったのだろうと考え、すぐに気づく。テレビは二階の居間か一階の店内にしかない。居間は現在ヒバリが寝泊りするために使用しているし、店内には用事があるとき以外は立ち入らないように蓮太郎に言われていた。思い返してみれば、もう三日ほどテレビを見ていない。店を手伝えない鬱憤を、ここぞとばかりに予習復習にぶつけていたのだ。

「すごいタイミングなんだよ。ホンハが陥落したのは今から五年前の何月何日だったか――ええと、今日は七月九日だから、出席番号九番。答えて」

出席簿に目を落としながら教師が告げたのは、いばらの番号。

驚きながら、とりあえずいばらは立ち上がる。

「お、木ノ内くんか。今日は寝てないようだね」
軽口に教室中から笑いが漏れたが、いばらは愛想笑いさえ浮かべなかった。いばらがこうして暗澹たる気持ちでここ数日を過ごしているのは、もとはと言えば居眠りのせいなのだ。金輪際、授業中に居眠りなどするものか。
「で、ホンハが陥落したのは？」
「……二二一四年の七月一五日です」
淀みなく回答できたのは、予習復習の賜物ではない。ロビンがホンハの出身だと知ってから、なんとなくいばらは彼の国がどのようなところだったのか興味が湧いたのである。だから、授業に関係なく、インターネットなどを利用して調べた。
（五年前……あんま覚えてないな）
きっと大きなニュースになったのだろう。しかし、当時一一歳だっただろういばらは、ホンハ陥落という歴史的事件に対しての記憶があまりない。というよりも、まったく覚えてない。その当時のいばらは、東南アジアの一角で起こった出来事よりも、自分自身に起こった変化のほうが重要だったのだ。
「そうだね。つまりお姫さまが捕まったのは、ちょうどホンハ陥落五周年の一週間前ってわけ。五周年を記念してハノイでは記念碑が造られてて、来週が完成予定だっていうのは知ってるかな。その除幕式には、もちろん現在来日中のセア・サルベ総帥も出席されるんだけど……運命だよね、総帥が来日中に日本で捕まるなんて」
教壇でうっとりと語る若き男性教師は、心からルーフや保安委員会を敬愛しているのだろう。起立したまま教室中を見渡せば、同じような表情をしているものは多い。みな、人智を超えた能力を有する若きルーフの王に心酔している。天災を予知できる能力とともに、セア・サルベには奇跡を起す力があるのかもしれない。今回の一件は、ますます若き指導者の神秘性を高めた。
一ヶ月前のいばらだったなら、恐らくは教師に共感することができただろう。

この世界に起こる天災と人災からひとびとを守ってくれるひと。それが、セア・サルベという人物に対する大半のひとびとの認識だ。いばらも、セア・サルベはきらいではない。ニュース番組のコメンテーターが言うように、彼はすばらしい人物なのだろう。けれど、今は素直にこの奇跡を受け止めることはできない。

（ロビンくん、知ってるかな）

脳裏に過ぎるのは、クラスメイトの不機嫌な横顔。

彼が滅びた故郷に対してどのような感情を抱いているのかは知らない。しかし、蓮太郎のサンドウィッチを嬉しそうに頬張った姿からは、けして悪感情は見出せなかった。たとえ世界中から後ろ指をさされているにしても、ホンハは彼の国なのだ。着席をすることも忘れ、立ったまま思案に暮れる。

「ん？　もう座っていいよ、木ノ内くん」

教師に促されるが、大人しく座ってこのあとの授業を聴く気にはなれなかった。

「先生」

いばらは左頬に掌を押し当て、顔を顰める。

「この間先生の代わりに殴られた頬が痛いです」

「はあ？」

あからさまに怪訝な表情を見せるが、いばらも譲らない。大仰に痛がってみせれば、胡乱そうな顔のまま「とりあえず保健室行ってきなさい」と言われた。絶対にうそだというのは気づかれているが、過程はどうあれ、彼を庇っていばらが殴られたということに対しては多少の罪悪感を覚えているらしい。内心で喝采をあげつつ、表では痛そうな顔をしていばらは教室から出た。

＊

二一一七前までの人類は、未来になればなるほど科学は発展する、と信じていたらしい。大学時代に興味があって調べた資料によると、

こと、二〇世紀から二一世紀にかけて発行された小説や漫画には魔法のような機械が登場するものが多い。

確かにそんな未来はあった。彼らが望んだ、科学技術の発展は。けれどその時代を迎えたひとびとは諸手を挙げて喜ぶことができなかった。

まず、医療技術の進歩によって出生率は大幅に低下し、難病の多くは克服され、平均寿命も高くなった。つまり、世界人口、もっと具体的に言えば、労働人口は増加の一途を辿っていたのである。だが、優れた科学技術によって生み出されたマシンの数々は、至る場所での作業工程を奪い取ってしまう。今からすれば信じられない話であるが、一日に一万個のパンを出荷する製パン工場の稼動には、朝夕合わせてたったふたりの従業員で事足りていたという当時の記録も残されている。増加する労働人口に対し、あまりにも少ない労働の場。全世界で大量の失業者が誕生し、彼らは生きるために犯罪にと手を染める。機械化による人員削減の方針など、もはや誰も歓迎などしていなかった。

また、こういう話もある。

ある国の政治家は選挙の際、戦争をおこすことを公約にして多くの支持を集めたという。軍需産業が活発になれば働き口が増加する、徴兵されれば職にあぶれて悪行に走る若者たちがいなくなる、そしてなにより、戦争が始まれば多くのひとが死んで人口が減少する。正気の沙汰とは思えないが、その政治家は投票者からの過半数の票を得て当選した。もちろんそのような愚かしい公約に対して他国が黙っているはずもなく、国外からの激しい非難を浴びて彼は失脚した。

科学の進歩は喜ばしいものである。さまざまな可能性と希望を、人類に与えてくれる。だが、その進歩に人類自身が追いついていない場合、それは猛毒となる。そのことを悟った科学者を主とする当時のひとびとは、なんとか人類自らが生み出した猛毒に蝕まれぬよう、できることなら科学と人類の関係が適切な状態にまで戻ろうと

した。
　これがのちにいう、反文明改革である。
　不必要な豊さを供給する文明機器を捨て、文明レベルを過去に下げよう、という運動。主導となった科学者のヴァネッサ・リーは、西暦二一二三年、「労働こそがひとが社会との結びつきを深く実感し得る機会である」と述べ、「利便性の追求はナンセンスである」という考えの下に、「魔法のよう」な機械たちの一切を撤去することを訴えた。当時誕生したばかりのルーフの初代大統領ベルナルド・アレクシアもヴァネッサ・リーと意見を同じにし、加盟国に反文明改革に参加するよう強く求めた。しかしながら、誰しも慣れ親しんだ便利な生活をすぐに捨てられるわけではない。そこで、二一二三年を基準とし、以後十年毎に二〇年程度『時代』を遡ること――もちろん、医療をはじめとする特定の分野ではせっかく得た技術を破棄する必要はないので、審議対象からは外されていた――が取り決められた。西暦二二一九年の今日、文明レベルは一部を除いてはおよそ二一世紀前半程度のものだと言われていた。
　――だから現在、藤平大輔とその同僚は、二一世紀のひとびとからすれば未来人であるにもかかわらず、彼らと同じように荷を運送するためにトラックに乗っている。重い荷物を瞬時に転送してくれるようなワープ装置など、今の世には存在しない。空を縦横無尽に飛ぶことができる車もバイクもないから、苛々しながら信号が青に変わるのを待つしかない。
「だりいなあ」
　なかなか変わらない信号に舌打ちしながら、大輔は短くなった煙草を携帯灰皿に押し当てる。寡言家らしい運転席の同僚は、ちらりと大輔を一瞥して小さく頷いた。信号が長く感じるのは、この愛想のない同行者のせいもあるだろう。
「こっちは保安委員会なんだからさ、ちょっとはこう、特典とかないのかねえ。警察みたいに信号を青に変えちゃう装置貸してくれるとか、救急車みたいにサイレン鳴らしてみんなに道譲ってもらうと

か」
　車窓に目を向けると、真っ赤なスポーツカーが見えた。ドアにもたれるように身をずらして見下ろしてみれば、こちらを見上げていたらしい若者と目が合う。決まりが悪そうに、大学生風の青年は目を逸らしてしまうが、彼が寸前までどのような眼差しで大輔を見ていたのかは想像できる。おんぼろなトラックだが、車体には堂々と「統合国家共同体保安委員会日本支局」と書かれているのだ。
　大輔は急に誇らしい気持ちになって、緩めていた真紅のネクタイを締めなおす。高いところから見下ろすのは気持ちの好いものだ。だからセア・サルベも、必要以上に高いビルを本部として建てさせたのだろう。世界中のメディアから高潔なひとがらと褒めそやされる同い年の指導者も、所詮はひとなのだ。
「……急ぐ任務ではないからな」
　期待していなかった返事を意外に思いながら、大輔は視線を窓から同僚に移す。
「そりゃそうだけどさ――いやいや、来日中の総帥閣下さまが所望しておられる大事な積荷を運んでるのよ？　一刻も早く届けるべきじゃねえの？」
「速やかに、とは命じられていない」
「行間を読むって大事だと思うけどね。空気っていうか」
「藤平は職権を濫用したいのか？」
　ぴたりと言い当てられ、大輔は言葉を失う。一拍後、己の失態をひどく呪ったが、だからと言ってやり直せるわけでもない。せいぜい、「はあ？　ばっかじゃねえの」と強がりを吐き捨て、会話を打ち切る意思表示として車窓と睨めっこすることしかできない。信号がタイミングよく青になってくれたおかげで、車が動き出す。運転に専念しだした同僚は、きっと次の信号で止まるまではなにも言わないだろう。
（職権濫用、なんて大したもんじゃねえだろ）
　窓枠に肘を預け、顎を手の甲で支えながら流れゆく平穏な昼下が

りの街並みを眺める。有名な飲料会社のトラックが、コンビニエンスストアの駐車場に停車しているのが見えた。真っ赤なケースを抱える若い配達員の人生をなんとなく想像してみる。工場で生産された飲料をトラックに積み、指定された店へと運ぶだけの毎日。きっとつまらない人生を歩んでいるのだろう。かわいそうに、せっかく大手企業に就職できたのに、やっているのはただの荷物運び。哀れみの皮を被った嘲笑を浮かべるも、ガラスに映った己の表情に不愉快さが込み上げて眉宇をひそめる。

（あの兄ちゃんとおれ、なんも変わりねえしな）

統合国家共同体保安委員会の職員と言えば、エリート中のエリートだ。

学力はもちろんのこと、身体能力も問われる採用資格取得試験。合格しても、それはあくまで採用資格を得るための試験であって、採用試験ではない。本番の採用試験は一年がかりで行なわれ、言語を絶する過酷な試験内容に多くのものが脱落する。悪名高い「拷問耐久テスト」が行なわれるのも、このときだ。きらいな食べものを強制的に克服させられる「味覚矯正訓練」も地味に辛い。それらをすべてパスして、ようやくエリートの仲間入りができる。

大輔は、採用試験を半分までクリアしたところで脱落した。だから本当は、エリート中のエリートなどではない。ただ、例年ごくわずかに募集される補欠採用枠で採用されたに過ぎない。所詮は補欠である。

――どうしてそれほど入会したいと考えるんだ？

最終試験、面接官のひとりであった薄い色の髪の青年が言った。漆黒のスーツに身を包んだ、そう年の変わらない彼が保安委員会のトップに君臨するセア・サルベだと知ったのは、それから半年後のこと。当時はまだ二代目セア・サルベが亡くなって間もなく、三代目をのちに襲名する彼は一士官の身でしかなかった。大輔はただ、同い年ぐらいなのに偉そうだ、といういやな印象を抱いた。

――夢だからです。

提出したレポートには、志願理由をたっぷりと書いていたはずである。目を通していないのかと腹を立てながら、大輔は簡潔に答える。ニュースで目にした保安委員会職員が幼心にヒーローに見えたこと。ルーフの治安を守るという存在意義への共感。巷で流通している『保安委員会試験合格指南書』に書かれていたポイントを織り込みながら、必死で熱弁をする。話し終えた大輔に、セアは冷ややかに微笑んだ。

――それは、誰の夢？

たった、一言。

けれどそれは、大輔の人生を打ち砕くのに十分すぎた。

戯れの言葉遊びなどではないことは、セアのすべてを見透かしたような真っ直ぐな双眸から察することができる。彼は大輔を見抜いていた。レポートに印字されている文章の全部が寄せ集めの塊であることも、大輔の語る言葉の空虚さも――否、一切見せることも匂わせることもなかった大輔の裡にあるものさえも。

――そこまで望むなら、入会を許そう。

まるで憐れむような優しさに満ちた響き。

採用を宣言されたというのに、大輔はただただ青年の存在に圧倒されるしかなかった。惚けたように口を開いて、セアの一挙一動を見つめることしかできない。他の試験管たちが押し黙る中、悠然と青年は椅子を引いて立ち上がり、退室していった。残された大輔には、やはり喜びなど浮かばなかった。得体の知れない敗北感だけが、うっかり飲み込んでしまったあめ玉のように、喉元に違和となってつっかえていた。

数日後、入会許可証が自宅に届いたときにはさすがに嬉しさが込み上げてきた。母は保安委員会のロゴが入った封筒を見ては涙ぐみ、父も数年ぶりに大輔に向かって笑顔を見せてくれた。代議士や弁護士として、あるいは一流企業に勤める会社員として毎日忙しいだろう兄たちや姉も、お祝いと称して久方ぶりに家に帰ってきてくれた。

――大輔はやればできる子だと思っていたわ。

子どものように赤い目をして、母は言葉を詰まらせながら言う。
代議士の父。
有名な映画女優だった母。
父のあとを継いだ長兄。
一流企業に勤める次兄。
弁護士の姉。
父の選んだ大学に入ることのできなかった大輔にとって、保安委員会の入会は最後のチャンスだった。優秀な兄たちや姉とにも見劣りしない肩書きが欲しかった。鶏口になる才すらない己には、牛後となる他に道はなかったのである。世界中の誰もが認めるエリートの仲間入りを果たしたことで、やっと大輔は家族の一員として認められた。その夜、大輔は自室に戻ってから声を押し殺して泣いた。緊張が緩んだためだったような気もするし、なにかを踏みにじられたような屈辱感からだったのかもしれない。とにかく、枕に顔を押し付けてそのまま眠るまで泣き続けた。その甲斐あってか、翌朝目覚めたときにはすっかり気持ちは晴れやかになっていて、新しい門出に相応しい成長した自分になれたような気がした。
だが、いざ入会してみれば喜びは一気に失望へと変わった。
組織内の郵便物、あるいは荷物の配送。
それが、大輔に与えられた仕事のすべてだったのである。学力も身体能力も必要ない。ただ運転免許だけがあれば十分だった。トラックに飲料会社のロゴがついているか、保安委員会の名が記されているか、ただそれだけの違いである。信号は待たなければならない。渋滞に巻き込まれれば足止めをくらう。特別なことなどない。
命じられるままに荷物を運ぶ。
余計なことはなにも考えなくていい。
なるほど、これはセア・サルベ流の皮肉なのかもしれない。
父母の言うとおりに生き、父母の夢を己の夢と告げた愚か者への。
「ああ、もうだりいなあ！」
反感を覚えながらも、結局は組織にい続けている自分。そして、

命じられるがままにセアのために荷物を運んでいる現状。なにもかもが気持ちを鬱屈とさせる。
「あのさ、歌うたっていい？　大音量で。ロックで絶叫系」
気晴らしをしたいと申し出れば、相棒は露骨に顔を顰めた。
「いーじゃん。ラジオも音楽もなくて静かだし、盛り上がりに欠けるんだよ」
「……もう少し行くと民家も人通りもあまりない道に出るから」
彼なりの譲歩であることは分かったので、大輔は了承する。けれど叫びだしたい気持ちは収まらないので、突風をあえて浴びるために窓を全開にする。対向車がないのを確かめてから、顔を少し出してみる。髪をなぶって吹き去る風の爽快感は格別で、轟々とうるさいそれに紛れさせてなにかを熱唱したい衝動に駆られた。鼻歌を歌いながら、流れゆく景色を楽しむ。どうやら学校の脇を走行中らしく、フェンス越しに広大なグラウンドが見えた。高校生ぐらいの男女がジャージ姿でサッカーをしている。おれも混じりたいなあ、などと呑気なことを考えている間にフェンスは途切れ、校門が現れ、学校の敷地の終わりが近付く。
さらば青春よ、などと気障なことを胸中で呟いて顔を車内に戻そうとしたとき、激しい衝突音、派手な転倒音とともに大輔の額はしたたかに窓枠に打ち付けられた。車がなにかにぶつかったらしい。
「……んだよ！」
頭蓋骨が割れそうなほどの衝撃に憤って、運転手を睨みつける。しかし同僚は大輔に構うことなく車から降り、なにかに駆け寄る。気乗りしなかったが、何が起こっているのか分からないのも癪だった。ささったままのキーを抜き取ってから大輔も車から降りる。同僚が膝を立てた前には、尻餅をついたひとりの少年と倒れた自転車が一台。衝突したにしては少年が怪我をしている様子はないので、盛大に凹んだガードレールが相手なのだろう。始末書のことを考えると億劫だが、死人がないだけマシだ。
「大丈夫か、きみ」

普段はあまり感情を見せない同僚だが、さすがに声からは狼狽が伺える。癖のある黒髪の少年は擦りむいたらしい腕をさすりながら、不機嫌そうな顔で立ち上がった。足腰はしっかりしているようである。そこの高校の生徒だろうかと思ったが、明らかに私服とわかる恰好なので違うのかもしれない。

「……大丈夫っす」

言葉少なに告げて、起した自転車に跨ろうとする。

まさか、そのまま何ごともなかったかのように去って行くつもりなのか。

「ちょっと待ちなよ。一応こっちも仕事中の事故だから、詳細を上司に報告しなきゃいけないんだよね」

「あ？」

漆黒のスーツに真紅のネクタイの意味を知らないはずはないだろうに、少年はやけに不遜な態度だ。二対一。大人対子ども。保安委員会対一般人。どの角度から見ても彼に分はないはずなのに、どうして臆することがないのだろう。逆に感心する。

「てめえらのほうがぶつかってきたんだろうが」

同僚に目配せで確認すれば、沈痛な面持ちで首肯した。

大輔は大仰に肩を竦めてため息をつく。

「なるほど。じゃあ、慰謝料を払わなきゃだ。ちょっと手続きが要るんだけど――」

「金なんて要らねえよ。それより急いでんだ」

大きな怪我はないとはいえ、地面に叩きつけられて痛かっただろうに、慰謝料を断るとは。大輔は自分よりやや長身の少年に興味を持つ。しかし引きとめる理由もないので、とりあえず懐から財布を取り出し、入っていた紙幣を全部彼に握らせた。ざっと目測したところ、五万円ぐらいはあるだろう。無傷で済んだ事故の示談金としては安くない。

「変なうわさ流されると困るから」

要は口止め料である。

慰謝料を受け取らない代わりにあることないこと吹聴されては困る。
少年はあからさまにいやそうな顔をしたが、大輔の意図するところに気づいてか、やや乱暴な仕草で紙幣をポケットに捻じ込む。世間知らずの馬鹿ではないようだ。しかしながら、こんなに不満そうに金を受け取る人間を大輔は初めて見た。
「じゃあな」
それきりとばかりに、無愛想に別れを告げて少年は自転車をこいで行く。その背を見送れば、やはり校門の前で停止した。しかし中には入らず、携帯電話を取り出して耳元に当てる。学校関係者に用事があるのだろうか。
「キー」
ぐいっと肩を掴まれたことで我に返る。盗難を危惧して抜き取っていたキーを運転手役の同僚に渡せば、彼は運転席ではなくトラックのにだいコンテナへと向かう。積荷が今の衝撃で破損していないかを確かめるためなのだろう。大輔も足早に彼を追った。
「どうだ？」
扉を開け、薄暗い中に同僚が入っていく。車が来ないかを道路で確かめていた大輔だが、後続車も対向車も見当たらなかったので、同僚に続いてコンテナの中にあがることにした。どうせ、保安委員会の車にクラクションを鳴らすものなどいない。
コンテナ内がひんやりしているのは、小型のクーラーが設置されているためである。非常にデリケートな積荷らしく、空調には気をつけるようにと上司から念を押されていた。夏めく外気に比べれば、ひんやりと心地好い。ここだけ春先に戻ったようだ。
「固定がちょっとずれたみたいだ。直そう」
普段はダンボールや木箱で埋め尽くされているコンテナ内だが、今日は奥に大きな木箱がぽつんとひとつあるのみ。これを、日本支局にいるセア・サルベに届けるのが、現在のふたりの任務なのだ。なによりもそれを優先しなければならないため、他の担当配送物は

別のものにすべて振り分けられている。
　気のない返事をして、大輔は同僚を手伝うために木箱の許へと進む。本心では、あまりその荷物に近付きたくなかった。得体が知れないためである。普通、書類や書籍などといった紙媒体はダンボールに入れられる。そのほうが木箱を用いるより軽量であるし、いざというとき焼却処理しやすいためだ。木箱を用いるのは、割れ物やデリケートなもの、あるいは武器などの危険なものである。ある程度外からの刺激に頑丈で、中に緩衝材をたっぷりと詰めることができるからだ。
　今朝、この木箱を同僚とともに運んだとき、大輔は今まで運んだどれとも違うことが感触として分かった。正方形の木箱の大きさは、高さが大輔の腰よりも高いことから、高さも幅も一メートルを超えるのだろう。重いには重いが、大人ふたりで十分足りる重さ。一立方メートルの木箱いっぱいになにかを詰めたら、そうはいかない。ということは、中身はさほど重くはないが、ある程度の大きさが必要なものということになる。
　彫刻かなにかだろうかと考えたが、それにしては中身が木箱にぶつかったときの音が柔らかかった。また、彫刻ならば空調を気にする必要もないだろう。食べものにしては、冷蔵庫よりは温かいという設定温度が中途半端だ。動物にしては鳴き声がしない。動く気配もない。
　不気味だ、というのが正直な感想である。
　しかし、及び腰になった姿をさらすのは耐え難い。何食わぬ顔で、大輔は木箱の位置を戻すため、側面に取り付けられている取っ手を握る。せーの、と一方的な掛け声を発して同僚とともに持ち上げようとして、異変に気づく。
　軽かった。
　運びこんだときとはまるで違う。木箱の虚しい重みしかない。
　衝撃は同僚もまた同じだったようで、ふたりで無言のまま見つめ合う。盗難の可能性は低い。先ほどまでコンテナは鍵が掛かってい

た。まさか中身は氷塊で、溶けてしまったわけではないだろう。現に木箱が濡れている様子はない。
「……おい」
緊急事態が起こっていることを察し、掠れた声で同僚に呼びかける。しかし、返事は無い。こんなときでさえも寡黙を通すのかと苛立ち混じりに睨みつければ、同僚は突然の睡魔に襲われたようにまぶたを閉じ、木箱に伏せるように身体を崩れさせた。大輔が絶句したのは、同僚の突然の行動にではない。崩れた屈強な男の後ろから、いるはずのない第三者が現れたためである。
「お、ま」
誰何の問いが最後まで続かなかったのは、第三者である少女が手にしていた棒のようなもので大輔の鳩尾を強烈に突いたせい。息が止まり、続いて眩暈を伴なうほどの激痛が身体中に走る。うまく呼吸さえできず、けれど不様に崩れ落ちることだけはしたくなくて木箱にしがみつく。
少女は――夏だというのに、冬に支給される保安委員会のトレンチコート、さらには同じく委員会指定のブラックウォッチ柄のストールまで身につけた、白っぽい色のロングヘアの見知らぬ少女は、大輔に一瞥くれることもなく外に目を向けていた。大輔を沈黙させた棒のようなものが、鞘に納まったままの刀であることに薄れゆく意識の中で気づく。
「……プリミティヴだ」
抑揚のない低い声で呟いたかと思えば、長靴の踵を鳴らしながら光射す明るい道路のほうへと真っ直ぐに進んでいく。直感的に彼女が木箱に納められていた積荷だと悟った大輔は必死に手を伸ばして引きとめようとするが、揺れる彼女の髪に触れることさえできなかった。呼び止める声すら出ない。息も絶え絶えに宙に腕を伸ばしながく大輔とは対照的に、少女は優雅にコンテナを脱出してしまう。もう間に合わない、と諦めた瞬間、靄がかかったように視界が白くなる。これから気絶をするのだろうと他人事のようにぼんやり考え

ながら、大輔は身体から力を抜く。
――きみは荷物もろくに運べないのか。
そう言って、記憶の中のセアが嗤った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7725i/

コンステラチオン

2010年10月10日03時41分発行